

Ⅲ 義務教育9年間を通じた 系統的・連続的、 協働的な学習指導例

事例 1-1 杉並区立下高井戸子供園（・高井戸第三小学校）

単元名

5歳児

◆◇ 5年生との交流給食 ◇◇

～交流給食を通して、小学校生活や給食への期待をもつ～

1 2030年を生きる子どもたちに身に付けさせたい力と教師・学校の役割

(1) 杉並区立下高井戸子供園（・高井戸第三小学校）

新幼稚園教育要領では、新たに「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」が示され、幼児期の教育の充実とともに、小学校教育への円滑な接続の重要性が求められている。杉並区教育ビジョン 2012 においても、子どもの成長と学びへの切れ目のない支援が大切に考えられている。

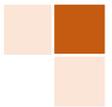
幼児期の教育は、生涯にわたる人格形成の基礎を培う重要なものであり、幼児教育は、幼児期の特性を踏まえ、環境を通して行うものであり、とりわけ、幼児の自発的な活動としての遊びを通して学んでいくことが大切である。幼児が友達と一緒に遊ぶ体験を通して、人と関わることの楽しさを感じ、自分も友達も大切にする気持ちや、多少の困難があっても自分の思いを実現するために取り組もうとする心が育まれていく。

また、必ずしも幼児の就学先となる小学校との連携とは限らないが、小学校の人・もの・ことと触れ合うことを通して、幼児が「小学校」という新しい世界に期待感を高め、段差を乗り越え、小学校生活や学習に円滑に移行できるように、幼保小連携の充実を図っている。そのためには、保護者との連携も不可欠であり、保護者へ就学前教育から小学校教育への学びの連続性や環境の変化について分かりやすく説明し、小学校生活への見通しがもてるようにしている。

本園においても、杉並区就学前教育振興指針及び杉並区幼保小接続期カリキュラム・連携プログラム「ぐんぐん伸びるすぎなみの子」に基づき、小学校以降の子どもの発達を見通した上で、就学前の時期に育てるべきことを生活の中で育てていくことが大切であると考え、取り組んでいる。このことは、小学校以降の子どもの生活や学習においても重要な、自ら学ぶ意欲や自ら学ぶ力につながると考えている。そして、生涯にわたる生きる力・乗り越える力の基礎を培うことになることを確信している。

2 多様で一貫性のある総合的な学びにおける本単元の位置付け

	就学前			小学校	
	3歳児	4歳児	5歳児	第1学年	第2学年
系統性	幼児と児童が交流することを通して、児童に憧れの気持ちをもったり、小学校生活に期待をよせたり、自分の近い未来を見通すことができるよう、意義のある交流活動にする。			異年齢集団による交流を重視するとともに通して、協働することや、他者の役に立つ	
連続性	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; display: inline-block;">交流給食</div> <p>①自分の好きな遊びをする。</p> <p>②友達とかかわり合いをもつ。_____</p> <p>③友達のよさを認める。_____</p> <p>④異学年との交流を楽しむ。_____</p>				
協働	<ul style="list-style-type: none"> ・ 幼児期にふさわしい生活を通して、創造的な思考や主体的な生活態度などの基礎を培うよう、保育者と教員が連携を ・ 幼児教育と小学校教育との円滑な接続が図れるよう、保育者と小学校教員との意見交換や合同の研究会の機会などを ・ 幼児が豊かな生活体験を得られるよう、地域の人材や公共施設などの地域の資源を積極的に活用する。 				



(2) 育成を目指す主な資質・能力	
<p>【子供園】</p> <p style="border: 1px solid black; padding: 2px; display: inline-block;">知識及び技能の基礎</p>	<p>【小学校】</p> <p style="border: 1px solid black; padding: 2px; display: inline-block;">知識及び技能</p>
<p>豊かな体験を通じて、感じたり、気付いたり分かったり、できるようになったりする。</p>	<p>多様な他者と協働する様々な集団生活の意義や活動を行う上で必要となることについて理解し、行動の仕方を身に付けるようにする。</p>
<p style="border: 1px solid black; padding: 2px; display: inline-block;">思考力、判断力、表現力等の基礎</p>	<p style="border: 1px solid black; padding: 2px; display: inline-block;">思考力、判断力、表現力</p>
<p>気付いたことやできるようになったことなどを使い、考えたり、試したり、工夫したり、表現したりする。</p>	<p>集団や自己の生活、人間関係の課題を見だし解決するために話し合い、合意形成を図ったり、意思決定したりすることができるようにする。</p>
<p style="border: 1px solid black; padding: 2px; display: inline-block;">学びに向かう力、人間性等</p>	<p style="border: 1px solid black; padding: 2px; display: inline-block;">学びに向かう力、人間性</p>
<p>心情、意欲、態度が育つ中で、よりよい生活を営もうとする。</p>	<p>自主的、実践的な集団活動を通して身に付けたことを生かして、集団や社会における生活及び人間関係をよりよく形成するとともに、自己の生き方についての考えを深め、自己実現を図ろうとする。</p>

				中学校	
第3学年	第4学年	第5学年	第6学年		
に幼児、高齢者、障害のある人々などとの交流や対話、障害のある幼児・児童・生徒との交流及び共同学習の機会をたり社会に貢献したりすることの喜びを得られる活動を充実させる。					系統性
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; display: inline-block;">交流給食</div>					連続性
→					
→					
→					
図り、共通理解の下、指導を行う。 設け、連携を図る。					協働

- I 小中一貫教育 理論編
- II 総合的な学び 理論編
- III 総合的な学び 実践編 就学前**
- III 総合的な学び 実践編 小学校
- III 総合的な学び 実践編 中学校
- III 総合的な学び 実践編 特別支援
- IV 資料編

3 学びを通じた成長

(1) 子どもたちの活動する姿

時間	活動内容・活動の様子	
	幼児	児童
11:45	○小学校に行く準備をする。(トイレを済ませる。)	
11:50	○子供園出発	
12:00	○小学校到着 (正門) ・5年生の第2昇降口使用 (靴は、5年生の空いている靴箱を使用する。)	
12:05	○図書室で、学校司書の先生に読み聞かせをしていただく。 ○司書の先生に、お礼を言う。 ○図書室の水道で手洗い、うがいをする。(荷物は、図書室に置いておく。)	○年長園児を迎える準備をする。各グループに人数分の椅子を置く。席に、園児の名札を置く。
12:30	○教室に向かう。	○5年生分の配膳は先にしておく。
12:35	○グループに分かれ、各教室に入る。 ・給食の準備をする。 ・配膳する。(5年生に手伝ってもらう。)	○配膳を後ろから見守り、必要に応じて援助する。
12:45	○「いただきます」をする。 ・給食を食べる。(次回の交流時に、どんな遊びをしたいかの話をしながら食べる。) ・お礼の言葉を言う。	○楽しい雰囲気会で会食する。
13:10	○「ごちそうさま」をする。 ・片付けをする。 ・トイレを済ませる。(5年生教室前のトイレを使用する。)	○園児の片付けの手伝いをする。
13:20	○帰り仕度をする。 ・荷物を持って昇降口に行く。	○トイレに行くよう声かけをし、一緒に行動する。
13:25	○芝生のところで並ぶ。 ・挨拶をして帰る。	○芝生のところまで行き、園児を見送る。
13:30	○小学校出発	
13:40	○子供園到着	

(2) 子どもたちの成長

本交流後、文字や数字への興味が高まるとともに、活動中に不安だった気持ちをペアの児童が思いやりのある対応をしてくれたりしたことで、小学校への関心も高まり、期待がふくらんだ。また、学校図書館での読み聞かせでは、いつもと違う場所、初めての先生との関わりの中で、小学校の雰囲気を味わうことができた。

さらに、幼児の自発的な遊びの中で、学校ごっこが始まった。ランドセルやノートを作り、勉強や給食ごっこをする様子が見られた。

また、児童の姿を間近に見た幼児は、普段の遊びの中で児童をまねた動きが多くなった。学校ごっこもその一つである。

これらのことは、児童の学習に取り組む姿から、知的好奇心が喚起され、「自分も同じことがしたい」「児童のように上手にできるようにになりたい」といった気持ちが芽生えたことによると考えられる。

4 学びのつながり、人の生かし合い

(1) 学びのつながり

ア 学校と社会をつなぐ学び（社会に開かれた教育課程）

家族を大切にしようとする気持ちをもつとともに、地域の身近な人と触れ合う中で、人との様々な関わり方に気付き、相手の気持ちを考えて関わり、自分が役に立つ喜びを感じ、地域に親しみをもつようになる。また、子供園内外の様々な環境に関わる中で、遊びや生活に必要な情報を取り入れ、情報に基づき、判断したり、情報を伝え合ったり、活用したりするなど、情報を役立てながら活動するようになるとともに、公共の施設を大切にするなどして、社会とのつながりなどを意識するようになる。

イ 系統性・連続性を確保した学び

①指導目標・内容（事項）の【系統性】

子供園においては、幼児教育が、小学校以降の生活や学習の基盤の育成につながることを考慮し、幼児期にふさわしい生活を通して、創造的な思考や主体的な生活態度などの基礎を培うようにする。

そして、幼児教育において育まれた資質・能力を踏まえ、小学校教育が円滑に行えるよう、小学校教員との意見交換や合同の研究の機会などを設け、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を共有するなど、連携を図り、幼児教育と小学校教育との円滑な接続を図るよう努める。

②学習と評価の方法の【連続性】

遊びを通して学ぶ幼児教育から教科等の学習を中心に学ぶ小学校教育へ接続する。そこで、幼児教育と小学校教育の段差をうまく乗り越え、子どもの育ちと学びをつなぐために、スタートカリキュラムを作成するとともに、幼児と児童の交流活動や保育者と小学校教員の連携、保護者への理解啓発等を積極的に進めていく。

③教科等横断的な学び

幼児教育で育みたい資質・能力として、「知識・技能の基礎」「思考力・判断力・表現力等の基礎」「学びに向かう力、人間性等」の三つを、下記の5領域（「健康」「人間関係」「環境」「言葉」「表現」）を踏まえて、遊びを通しての総合的な指導により一体的に育む。

健康

健康な心と体を育て、自らの健康で安全な生活を作り出す力を養う。

人間関係

他の人々と親しみ、支え合って生活するために、自立心を育て、人と関わる力を養う。

環境

周囲の様々な環境に好奇心や探究心をもって関わり、それらを生活に取り入れていこうとする力を養う。

言葉

経験したことや考えたことなどを自分なりの言葉で表現し、相手の話す言葉を聞こうとする意欲や態度を育て、言葉に対する感覚や言葉で表現する力を養う。

表現

感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする。

④主体的・対話的で深い学び

幼児期は直接体験が重要であることを踏まえ、視聴覚教材やコンピューターなど情報機器を活用する際には、子供園の生活では得難い体験を補完する等、幼児期の体験との関連を考慮することが必要である。

⑤過去・現在・未来の学びをつなぐ評価

幼児は、自発的な活動としての遊びを中心とした生活を通して、様々なことを学んでいる。その中で、幼児はそれぞれの興味や関心に応じ、幼児なりのやり方で学んでいく。特に、自我が芽生え始める3歳は、周囲の状況を顧みず、興味のまま動いてしまうこともある。しかし、自己を表出することが中心の生活から、次第に他者への存在を意識し、他者を思いやったり、自己を抑制したりする気持ちが生まれ、同年代での集団生活を円滑に営むことができるようになる。

(2) 人の生かし合い

ア 学校外

幼児は、情報化社会の中で多くの間接情報に囲まれて生活しているが、自然と触れ合ったり、地域で異年齢の子どもたちと遊んだり、働く人と触れ合ったり、高齢者をはじめ幅広い世代と交流したりするなどの直接的、具体的な体験が不足している。このことから、地域の人材等を活用し、幼児の心を揺り動かすような豊かな体験が得られる機会を積極的に設ける。

イ 異校種間

特に、幼児教育と小学校教育の円滑な接続のため、子供園の幼児と小学校の児童との交流の機会を多く設ける。そのためには、保育者と小学校教員の間で、教育内容や指導方法の相互理解をし、指導の工夫改善を行う。

ウ 同校種内

就学前教育では、小学校教育の先取りではなく、幼児期にふさわしい生活を通して就学まで育てる子どもの姿を見通した教育・保育を行うために、区内6園の子供園間で教育課程等の整合をとる必要がある。

5 高井戸第三小学校との交流の様子

1年生になった気分！



どんなお話かな。



当てられるかな。



どんなお勉強をしているのかな。



I 小中一貫教育 理論編
II 総合的な学び 理論編
III 総合的な学び 実践編 就学前
III 総合的な学び 実践編 小学校
III 総合的な学び 実践編 中学校
III 総合的な学び 実践編 特別支援
IV 資料編

◆◆ ぐんぐん伸びる すきなみの子 ◆◆

<打合せが大切だと分かっているも>

子供園と小学校。

発達の段階や教育課程の仕組みや指導方法など、様々な違いがあります。

子どもの発達や学びは、幼児期と児童期ではっきりと分かれるのではなく、学んだことが次の学びを生み出し、更に次の学びへと発展していくものです。

しかし、「交流給食」となると衛生面や安全面等、留意しなくてはならないことがたくさんあります。すると、限られた時間の中で打合せの中心になるのは、どうしても交流のやり方や配膳の手順になってしまいます。

本来なら、発達の段階や教育課程の仕組みの違い等、教育の本質に迫るよう共有する時間になることが望ましいと考えています。

<幼児と児童>

最近では、5歳と5年生、4歳と4年生、といった組み合わせが多くなりました。

5歳児は、翌年小学校へ入学。そのときお世話になるのが、新6年生の児童です。

そうです。子どもたちは初顔合わせではなく、顔なじみになっているのです。

しかも、ペアでの交流。

どう関わったらよいのか…。戸惑っている時間はありません。

特に、児童はペアの幼児が困らないように、楽しめるように、あれこれ考えて関わります。

<交流給食>

メニューは、子どもたちに人気のカレーライスやミートソーススパゲッティのことが多いです。

幼児は、場の雰囲気も手伝い、「もりもり」「パクパク」。ほとんど残さず、おいしくいただきます。

児童もこの日ばかりは、おかわりも幼児に譲ります。

「デザートじゃんけん」。

ペアの幼児が勝って、見事おかわりができた時には、自分のことのように大喜びです。

はじめは、お互い様子見で遠慮がちだった子どもたち。

「ごちそうさま」のころには、「わいわい」盛り上がっています。

<学校ごっこ>

交流給食後のある日。

幼児の遊びに「学校ごっこ」が登場しました。



先生役と子ども役。
積み木で机を作りました。
ランドセルやノートも手作りです。



黒板も作りました。
教室の再現がばっちりされています。



もちろん、給食の時間もあります。
「いただきます。」

<今後…>

やはり、保育者と教員同士の「つながり」が一番だと感じます。

保育者と教員自身がそれぞれの発達の段階や教育の内容を知ることには尽きるのではないのでしょうか。

連携することが目的ではありません。

お互いの教育の目標を達成するための手段の1つです。

この子というより、幼児期の子ども、児童期の子どもといった発達時期の子どもを知る機会になればよいと思います。

事例2-1 杉並区立井荻小学校（・荻窪中学校）

総合的な学習の時間

単元名

小学校第5・6学年

◆◆ 善福寺の自然を生かした環境学習 ◆◆

～ふるさとから学び、未来を創る～

1 2030年を生きる子どもたちに身に付けさせたい力と教師・学校の役割

(1) 杉並区立井荻小学校（・荻窪中学校）

本校は校内を善福寺川が流れている。杉並区を縦断する一級河川であり、東京都の川としては珍しく全長11kmが開渠になっている。井荻小学校の児童は、毎日校内からこの川を見ており、この川はまさに生活の一部になっているともいえる。善福寺川には、多くの野鳥、昆虫、魚、貝類が生息しているので、自然観察のフィールドとしての価値も高い。また、合流式下水道の排水口が多くあるため、大雨の後は生活排水が流れ込み水質が悪化する問題点を抱えていることも、環境を考える上では重要な観点である。大雨の後はかなり増水するので、災害について考えるきっかけともなっている。

また、善福寺公園は、日本野鳥の会を創設した中西悟堂先生が長く観察フィールドとした公園であり、常時50種類以上の野鳥や昆虫が観察できる。野鳥は、①常に見付けられる、②ある程度大きい、③昆虫や植物とのつながりが多様で豊富等の点で、教材として非常に価値が高い。観察を効果的に、系統的に行うため、平成27年度に「井荻小野鳥観察ノート」をつくり、観察会等で活用している。

(2) 育成を目指す主な資質・能力

- ・自然体験の中で自分なりの課題を見だし、それが表現できること。
- ・課題を解決するために、図書、新聞、インターネット等を活用できること。
- ・周りの人から学ぶことの重要性を知り、進んで協力して課題を解決しようとする。
- ・自分の課題について継続して丁寧に調べ、自分なりの学びができること。
- ・学んだことや、課題として残ったこと、自分自身の成長等について振り返り、表現できること。

2 多様で一貫性のある総合的な学びにおける本単元の位置付け

	就学前	小学校			
		第1学年	第2学年	第3学年	第4学年
系統性	自然に触れて感動する体験を通して関心を高める。	身の回りの自然と関わることで、様々なことを感じ、考える。		地域の自然と積極的に関わる中で、公園や川の現状や歴史を調べ、自然環境や社会環境について考える。	
連続性	野鳥観察 身近な動植物に心を動かされる中で、生命の尊さや不思議さに気付けるようにする。	善福寺川・善福寺公園の散歩と自然観察や、東京女子大での昆虫観察、生物飼育活動を通して、自然の不思議さを感じ取れるようにする。		チームで協力し、公園の野鳥の姿を記録できるようにする。また、井荻小学校内での観察会も行い、どこでも野鳥を見付けられるようにする。	
	川の学習	6年生による「善福寺川活動報告」を基に、善福寺川を散策し、情報を得ようとする。		善福寺川で多様な生き物を観察したり、環境調査を行ったりし、今後の学習につながるような自分の課題を見いだせるようにする。	
協働	○家族・保護者	○すぎなみ環境ネットワーク ○東京女子大学 ○善福寺川流域の方			

(3) ふるさとから学び、未来を創る～井荻小学校の環境学習～

環境教育で扱う分野は自然環境、社会環境、都市環境など多岐にわたるが、井荻小学校ではふるさとである学校周辺の豊かな自然を生かした「自然環境教育」をその中心に据えて、実践を進めている。自然を感じ、自然について考え、自然の仕組みを知ることが大切にし、自分を取り巻く「環境」についての課題をもつことができ、学んだことを生かして行動できる児童を育成することを目指していく。行動することで、将来にわたり、自分自身と、それを取り巻く自然環境・社会環境を創造できる人間の育成を目指している。

この視点は、「将来自分がどういう人間になり、自分の力を使ってどのように社会に貢献していくか」を考える点で、キャリア教育とも密接に結び付いている。

自分たちで「行動する」ことが始まった例として、平成 22 年度の卒業生が自主的に始めた「川の清掃活動」が挙げられる。この活動は、社会科での授業が、「善福寺川」での実践と結び付いて始まった。清掃活動は、毎年後輩へと受け継がれ井荻小学校の新しい伝統となっている。

平成 26 年度には、環境教育の実践と、児童の杉並区への働きかけという行動が認められ、ホテル水路が親水公園として再出発することが決定した。平成 28・29 年度は、先輩たちの意思を引き継ぎ、将来できる親水公園を地域の住民の一人として、どのように守り育てていくかを考えていく年になる。

○井荻小学校の環境教育を推進するための活動の 4 本の柱

- ・善福寺公園を中心とした、地域の公園等での自然観察会（4 年生以上は野鳥観察中心）
- ・善福寺川での川の観察会（3 年生以上は環境調査・清掃活動を含む）
- ・見付け出した課題を自分の力で解決するための学校図書館の活用と、それに続く自分の考えの発表
- ・各教科で日常的に行われている環境教育の充実

		中学校			
第 5 学年	第 6 学年	第 1 学年	第 2 学年	第 3 学年	
生命にとっての水や川の重要性や、生態系のつながりについて調べながら、環境保全について考える。		積み重ねた学習経験を生かして、広く環境について調べ、考え、具体的な行動に結び付け、主体的に発信する。			系統性
チームと協力しながらも、自分一人で観察記録を書き、野鳥の様子と、周りの環境との関係を考え、発表する。		自分の課題をもって、周りの環境と野鳥の関係を考えながら観察し、保全活動の方策を検討し、実践する。			野鳥観察 連続性
チームごとに自分たちの力で環境調査を行う。また、比較対象として野川に行き、善福寺川と同じ観察・環境調査を行い、考えを深める。		川の中や周辺の清掃活動を継続して行い、この川の自然環境・社会環境を調査する。その成果を基に周りの人に野鳥・自然の素晴らしさを発信する。			
○家族・保護者 ○すぎなみ環境ネットワーク ○環境教育の専門家					協働

I 小中一貫教育
理論編

II 総合的な学び
理論編

III 総合的な学び
実践編
就学前

III 総合的な学び
実践編
小学校

III 総合的な学び
実践編
中学校

III 総合的な学び
実践編
特別支援

IV 資料編

3 学びを通じた成長

(1) 子どもたちの活動する姿

○野鳥観察会



○野鳥観察会後の振り返りの授業風景



学校独自の野鳥観察ノート

Ⅰ 小中一貫教育 理論編
Ⅱ 総合的な学び 理論編
Ⅲ 総合的な学び 実践編 就学前
Ⅲ 総合的な学び 実践編 小学校
Ⅲ 外国語教育 実践編 中学校
Ⅲ 総合的な学び 実践編 特別支援
Ⅳ 資料編

〇川の学習



生物調査



川の清掃



環境調査



ホタル水路調査



野川調査

(2) 子どもたちの成長

3年生から続く川の調査や調べ学習、野川との比較調査等を積み重ねることで、関心が高まり、善福寺川に対する愛着が育っている。また、7年間の取り組みを今回改めて整理し、「その伝統の中に自分たちがいる」という思いが強くなり、6年生へ向けて自分たちも清掃活動を受け継ぎたい、という思いも高まっている。夢水路計画が開始された今、自分たちがどう関わっていくか、子どもたちもより具体的な活動を考えていくことに意欲的である。

本校では、環境に関わる活動を、系統的に学年ごとの計画を作り、授業と関連付けながら学習を進めている。学校全体で系統的に取り組んでいるからこそ、子どもたちの中にしっかり環境を考える力が育っている。今後もアクティブ・ラーニングである本活動、「自ら感じ、考え、知り、行動する」環境教育を進めていきたいと考える。



雨の降った後の川の様子

I
小中一貫教育
理論編

II
総合的な学び
理論編

III
総合的な学び
実践編
就学前

III
総合的な学び
実践編
小学校

III
総合的な学び
実践編
中学校

III
総合的な学び
実践編
特別支援

IV
資料編

4 学びのつながり、人の生かし合い

(1) 学びのつながり

ア 学校と社会をつなぐ学び（社会に開かれた教育課程）

全学習活動において、すぎなみ環境ネットワーク、学校支援本部との協働は不可欠になっている。特に、12月の野鳥観察会には、野鳥・環境の専門家、環境を学ぶ大学生等のサポーターが約20人集まり、レベルの高い観察会を実施している。また、自然観察、川の学習においても、たくさんの専門家のサポートを受けている。

イ 系統性・連続性を確保した学び

①指導目標・内容（事項）の【系統性】

学んだ体験や知識を中学校以降の、環境学習、調べ学習（アクティブ・ラーニング）、ボランティア活動、キャリア学習等に生かしてもらおうべく、小中合同研修会等で報告をしている。

②学習と評価の方法の【連続性】

2年生が1年生の町探検の援助、4年生が3年生に対して善福寺学習で学んだこと等の報告会、6年生が5年生に対して善福寺公園清掃活動のビブスとノートの引き継ぎ式を行う等、子ども同士の学び合い、伝え合いを行い、全学年が連続的に見通しをもって、学びを積み重ねられるようにしている。また、学校として統一した評価規準をもち、体験活動から課題を作り、最後は発信するといった共通の学習活動を繰り返すことで、学年を超えて共通の規準で評価できている。

③教科等横断的な学び

○課題を解決するための学校図書館の活用

野鳥観察や川の観察会で生みだされた課題を解決する方法の中で、図書を活用するのは大変有効である。本校では図書には次の価値があると考え、実態に応じて取り組んでいる。

- ・先人が実際に調べた結果が、分かりやすく示されている。
- ・多くの人が著作や編集に関わっている可能性が高く信頼性が高い。
- ・小学生にとって分かりやすく表現されているものが多い。

※学校図書館を活用した学習計画例（各学年5時間程度）

	◎目標 ・主な学習活動 ★印…地域の方との協働学習	○主な指導事項 ・主な指導上のねらいと留意点
1年	本を使って知りたいことを調べる 情報を抜き書く	様々な体験から興味を広げ「もっと知りたい」想いをもつ 体験から「知りたい」意欲をもつことや、分からないことが分かった喜びを味わうことを重視する。
2年	図鑑利用指導	体験の中で疑問に思ったことを自ら調べようと思う 「もくじ」や「さくいん」を使い図鑑を正しく使えるよう留意する。
3年	百科事典利用指導 情報カードの使い方 課題設定の仕方（ウェビングマップ）	身の回りの疑問を自ら調べようとする 情報収集のためにどの資料を選択すればよいかポイントを押さえるようにする。 奥付を見て、使った資料名を必ず書く。
4年	課題設定の仕方 （ウェビングマップとドーナツシート） 課題を深めるためのインタビューゲーム 情報カードをつかった収集と整理★ 情報のまとめ方（ピラミッドチャート）	自ら課題を設定し、進んで調べることができる 各自の課題は疑問文で具体的に設定できるようにする。 情報を収集するために複数の資料に当たるようにする。 クラスやグループの活動を取り入れ、キーワードを広げたり、課題を深めたり、まとめ方を工夫できるようにする。
5年	学習年鑑（統計資料）の使い方 新聞活用法 情報モラル・著作権	自ら課題を設定し、調べたことを基に自分の考えをもつことができる 自分の課題に対して仮説を立て、論の根拠になるよう調べることができるようにする。 著作権について学び、出典、参考文献、引用の意味を理解して活用できるようにする。
6年	根拠のある意見文 情報モラル・肖像権 想いを伝える発表★ 理科新聞	情報を活用し自らの考えをまとめ、分かりやすく伝えることができる 学んだことの中から、自分なりの新しい課題を生み出し、様々な情報を活用して調べ、自分なりの考察をした上で、結論を書くという課題解決が自分の力でできるようにする。

○他の教科等との関連：調べ学習及び表現活動については、国語科と関連させる。
 また、理科や社会科、時には道徳等、他の教科等との関連を図り、各学年の学習計画に位置付けていく。

※実際の活動例

	活動内容・テーマ	子どもの声・学び	
1年	ネイチャーゲーム (善福寺公園) 「はかせの秘密ブックを作ろう」 (学校の生き物調べ) (親子で調べる) 昆虫観察 (東京女子大学)	<ul style="list-style-type: none"> 自分で調べるのって面白い。 生き物が好きになった。 自分で探すのって楽しい。 	
2年	ネイチャーゲーム (校庭) 昆虫観察 (東京女子大学) 「虫の名前を調べよう」	<ul style="list-style-type: none"> 虫の名前をたくさん知りたい。 他の虫を見付けたい。 虫や花にも名前があることが分かった。 	
	活動内容・テーマ	調べ学習のテーマ	
3年	ヤゴ救出大作戦 (学校のプール) カイコを育てる 善福寺川の生き物調べ (善福寺川)	<ul style="list-style-type: none"> えさ、すみか、飼い方等 (ヤゴの育つ環境に着目する) トンボの種類 えさ、すみか、成長 善福寺川にいる生き物 善福寺川的环境 (水質・水辺) 	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> 他教科との関連 国語・理科 </div>
4年	「めざせ、善福寺博士」 (善福寺川)	<ul style="list-style-type: none"> 昔の生き物、今の生き物 外来種の種類と弊害 水の汚れ 水質の変化 川の構造 (三面張り・原因・生き物との関係) 	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> 他教科との関連 国語・社会 </div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 5px;"> 発表の場 3年生・保護者 </div>
5年	「里川に戻った野川体験」 「善福寺川について調べよう」	里川に戻った野川と比較して <ul style="list-style-type: none"> 生き物の違い 川の水質 川の構造の違い 里川に戻すために <ul style="list-style-type: none"> 水をきれいにする工夫 「みんなの夢水路」 ルールを作ろう 	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> 他教科との関連 国語・理科・社会 </div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 5px;"> 発表の場 4年生・保護者・ 環境サミット </div>
6年	「守ろう、みんなの善福寺川」	<ul style="list-style-type: none"> 清掃活動の歴史 善福寺川の現状 (生き物・水質・川の中のごみ・周辺道路のごみ) みんなの夢水路計画 私たちの願い 	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> 他教科との関連 国語・社会・道徳 </div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 5px;"> 発表の場 全校児童・保護者・ シンポジウム(区民) </div>

I 小中一貫教育 理論編

II 総合的な学び 理論編

III 総合的な学び 実践編 就学前

III 総合的な学び 実践編 小学校

III 総合的な学び 実践編 中学校

III 総合的な学び 実践編 特別支援

IV 資料編

④主体的・対話的で深い学び

善福寺川に関する自己の課題を設定し、調べ、まとめることで、善福寺川についてよりよく知るとともに、地域に対する興味関心を高めていく。一人一人が主体的に学びを深めていけるよう、ウェビングマップ、ドーナツシート、ピラミッドシートなどの思考ツールを活用したり、インタビューゲームなど対話の場面を意図的に設定したりしていく。また、学習がより活性化するようにそれぞれの場面でICTを活用していく。

具体的な活用例としては、次のようなことが考えられる。

- 活動の記録をデジタルカメラで残し、事後活動で自分たちの考えを伝える時の資料として活用する。
- その特性を理解し、短時間で最新の情報を得るために、調べ学習にインターネットを活用する。
- 学習の成果を発表する小中学生環境サミットや善福寺川「水鳥の棲む水辺」創出事業シンポジウムにおいて、プレゼンテーションソフトを利用した提案や発言内容のキーワードの記録の提示等を行う。

⑤過去・現在・未来の学びをつなぐ評価

善福寺公園・善福寺川の自然と直接触れ合い、身近な環境について様々なことを感じ取り、その課題を見付け出し、考え、知り、自ら行動を起こす児童・生徒の育成を目指し、次のような観点で評価を行っている。

- 課題をもつ力
実物と触れ合うことで、自分なりの課題をもつことができ、それが表現できる。
- 情報収集力
課題を解決するために、図書、新聞、インターネット等が活用できる。
- コミュニケーション力
課題を解決するために、周りの人から学ぶことの重要性が分かり、進んで協力して課題を解決しようとしている。
- 課題追究力
課題を解決するために、時間をかけ、丁寧に調べ、自分なりの学びができる。
- 自己を振り返る力
本学習を通して、学べたこと、課題として残ったこと、自分自身の成長について考え、表現できる。

(2) 人の生かし合い

ア 学校外

学校支援本部の協力を得ながら、それぞれの団体と連携を図り学習を進めている。

- ・ すぎなみ環境ネットワーク
- ・ 野鳥・環境の専門家
- ・ 東京女子大学
- ・ 杉並区役所 都市計画部土木計画課、環境部環境課等

イ 異校種間

それぞれの校種で環境学習に取り組んでいる経験を生かし、情報共有することで学びを深める。

- ・ 小学校で実施する自然観察に子供園の園児が参加する。
- ・ 小学校の取組に中学生がボランティアとして参加する。
- ・ 中学校の取組の支援を小学校教員が行う。

ウ 同校種内

それぞれの学校の実践の報告会を定期的に実施し、成果や課題を共有し、次の活動に生かす。

- ・ 善福寺川保全の取組について、グループが交流し、お互いの活動について助言し合う。
- ・ 環境サミットでお互いの実践交流を行い、環境を考える視野を広げる。

◆◆ 井荻小善福寺川活動のスタートと継続を支えたもの ◆◆

活動のスタートは子ども！

2010年2月、当時の5年1組。

社会科で京都の鴨川が市民の手でよみがえったことを知った子どもたちが、「善福寺川を自然の川にもどすために自分たちもできることをやろう」と動き出した。

彼らが始めたのは、放課後の周辺道路の清掃活動。

曜日を決め、その日に集まれるメンバーで活動開始。

キャリア教育で取り組んだお弁当販売で手に入れたわずかのお金は、みんなの合意で清掃に使う道具の購入に充てた。

子どもから子どもへバトンタッチ！

この活動は、6年生になっても引き継がれ、卒業のときには、5年生に取組の報告をし、あとを委ねた。

翌年の6年生、「自分たちのやりたいボランティア活動は、善福寺川清掃活動」と、先輩たちの意志を引き継ぎ、活動開始。

こうして、井荻小では6年生から5年生へと年々活動は引き継がれ、「6年生になったら、清掃活動をやるのが楽しみ」と子どもたちが言うまでになっている。

学校全体で活動を位置付ける！

子どもの活動を後押しするように、総合的な学習の時間を利用し、実際に川の中のゴミを拾う活動を年1回行うことにした。

その後、総合的な学習に川の活動を位置付け、3年生から6年生まで学年に応じた目標を設定し、学校支援本部の協力を得てどの学年も年1回、川の中に入る活動を続けている。

地域を変える活動へ！

学んだことは伝えたい。

自分たちが活動の中で学んだことは、子どもたちの意志で下級生、保護者に伝え、そしてシンポジウムなどを通して区民の方々や同じ思いをもって活動している大人たちにも広がっていった。

そして2014年、子どもたちの描いた夢水路設計図が区長に届けられ、ついに善福寺川の一部を「みんなの夢水路」とする区の事業が決定した。

未来を作るのは子どもたち！

ふるさとを思い、見つめる活動が、いつしか大きな流れとなって未来を変える力になってきている。1つの授業が、ゴミを拾うという小さな活動が、自分の生まれ育った「ふるさと」を思い、変える力になっていく。ひいては日本、地球という「ふるさと」を考え、未来を創る力になっていくに違いない。子どもたちの発想から生まれた活動ではあるが、その想いを大事に育て、育ててきたのはたくさんの大人たち。その1番は、やはり、教師。

子どもたちの気持ちに寄り添い、共に活動しながら守り育てる教師集団が本校にはあった。

そして、何より学年の学習内容を見通しながら、学年を越えた系統的な活動計画を作ってきたこと、学校全体の取り組みになったことで、先輩から後輩へ、子どもたちの中での学び合いが始まった。

学校全体で取り組むことの大きさを実感している。

加えて、学校支援本部の絶大なる協力。専門家の方々やマスコミの方々。大人の協力や評価は子どもたちに大きな力を与えた。

「ふるさとを思い、未来を創る」のは子どもたち、そして、その子どもたちを守り育てるのは、私たち大人であることを深く実感している。

呼びかけの言葉

・ごみとか、ゼロ目指そう。めっちゃきれいだったら、ポイ捨てしにくいじゃん。
 ・どんどん広めてみんなの意識かえちやおう
 ・無理せず長く続けよう
 ・最終的に善福寺川を鴨川に負けないくらいきれいにしよう

I
 小中一貫教育
 理論編

II
 総合的な学習
 理論編

III
 総合的な学習
 実践編
 就学前

III
 総合的な学習
 実践編
 小学校

III
 総合的な学習
 実践編
 中学校

III
 総合的な学習
 実践編
 特別支援

IV
 資料編

事例2-2 杉並区立杉並第四小学校（・杉並第八小学校、高円寺中学校）

総合的な学習の時間

単元名

小学校第4学年

◆◆ 杉四カンパニー ◆◆

～自分たちの町を自分たちでつくる力を育てる～

1 2030年を生きる子どもたちに身に付けさせたい力と教師・学校の役割

(1) 杉並区立杉並第四小学校（・杉並第八小学校、高円寺中学校）

高円寺地区は、自治会や商店街などのコミュニティのつながりが強く、地域全体で子どもを見守り、育てるといった意識が高い。地域による学校行事等への参画も積極的であり、子どもたちが意欲的に地域と触れ合うといった土壌が形成されている。例えば、東京の夏の風物詩と言える「高円寺阿波おどり」を運動会で中学生や保護者・地域の方々と一緒に踊るなど、地域とともに歩む学校づくりに積極的に取り組んでおり、子どもたち、教職員、この地域で育った方々や保護者が協働で学校を支えるという態度が醸成されている。また、高円寺北子供園との子小連携と杉並第八小学校、高円寺中学校との保幼小連携・小中一貫教育に取り組んでおり、11年間を通して高円寺の子どもたちを大きなネットワークで育てる取組を企画・実施している。平成31年度には施設一体型小中一貫教育校の開校を控えている。

このように多様な他者とのつながりが強いという特色があり、それゆえに子どもたちに対する地域からの期待も大きい。高円寺地区を更によりよい街にしていくためにも、「いいまちはいい学校を育てる～学校づくりはまちづくり～」を目指し、未来を担う人材となる子どもたちを育てるため、豊かな地域社会の形成に向けた取組がなされている。

(2) 育成を目指す資質・能力

グローバル化や情報化をはじめとした社会の加速度的な変化に、地域の一員としてどのように向き合い関わり、持続発展させるのかについて、これからの学校教育の中で考え、教育課程や各教科等の授業にまで浸透させ具体化していくことが、これまで以上に必要である。具体的な視点として、「義務教育修了ま

2 多様で一貫性のある総合的な学びにおける本単元の位置付け

	就学前	小学校			
		第1学年	第2学年	第3学年	第4学年
系統性	幼稚園生活を楽しみ、自分の力で行動することの充実感を味わう。	<ul style="list-style-type: none"> ・地域の人々や様々な場所に親しみをもって関わり、安全に楽しく生活する。 ・自分たちの生活が、地域の人々や様々な場所に関わりがあることに気付く。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「高円寺カルタ」「杉四カンパニー」の取組を通して、高円寺という地域に関心をもち、まちの人々との関わりの中で生活していることや、その中で気付いた課題について、よりよく問題を解決する資質や能力を身に付ける。 		
連続性	身近な環境に自分からかかわり、発見を楽しんだり、考えたりし、それを生活に取り入れる。	①まちを知る _____ ②課題をもつ _____ ③実践する _____			
協働	幼児と児童の交流の機会を設けたり、小学校の教師との意見交換や合同研究の機会を設けたりする。	[学 校 外] 学校支援本部及び地域の関係機関を中心に取組について協力依頼や渉外・広報活動について積極的に取り組む。 [異校種間] 小・中の接続を見据え、主権者教育やキャリア教育の観点から、育てたい資質・能力のつながりについて話し合う。			

杉四
カンパニー



でに全ての子どもたちに自立して社会で生きていく基礎を育てること」「社会を支え、発展させるとともに、国際社会をリードする人材の育成に向けた明確なビジョンをもたせること」「持続可能で活力ある社会を構築させるために、コミュニティをはじめとする社会全体と学校との連携・協働の中で問題解決を行うこと」等が挙げられる。

2030 年に向けて、これまでの学校教育と家庭、地域の連携を見直すとともに、多様な人々がそれぞれの強みを生かしながら相互に関わり合い、生涯にわたって学習できる環境を構築し、整備していくことが重要であると考えます。

- 自立して社会で生きる力

 - ・実践を通して、新たな課題を見いだす。
- 社会を支え、発展させる力

 - ・課題意識をもち、他者と意見交流を行う。
 - ・自ら調査をし、課題解決に必要な材料を集める。
- 問題を解決する力

 - ・よりよい解決に向け、多様な他者と協働する。

		中学校			
第5学年	第6学年	第1学年	第2学年	第3学年	
<ul style="list-style-type: none"> ・高円寺と他の地域とのつながりや自分の生活との関わりを知り、よりよい高円寺地域を構築していくために、将来、自分たちでできることについて課題意識をもち、解決に向けて考えていく。 		<ul style="list-style-type: none"> ・高円寺地域の公共施設や商店等を訪問し地域理解を深めるとともに、社会貢献活動への参画について考える。 	<ul style="list-style-type: none"> ・高円寺地域の職場訪問や職場体験から、地域で生きる人々の思いを知り、自らの将来について考える。 	<ul style="list-style-type: none"> ・これまでの体験を基に、地域の課題を見だし、創造的・協働的にその課題解決に取り組む。 	系統性
→					連続性
→					
→					
→					
[同校種内] 杉並区小中一貫連携校である杉並第八小学校と取組内容についての整合を図る。 [自 校 内] 学級や学年の担当間で教材理解及び教材研究についての共通理解を図る。					協働

- I 小中一貫教育 理論編
- II 総合的な学び 理論編
- III 総合的な学び 実践編 就学前
- III 総合的な学び 実践編 小学校
- III 総合的な学び 実践編 中学校
- III 総合的な学び 実践編 特別支援
- IV 資料編

3 学びを通じた成長

(1) 子どもたちの活動する姿

「杉四カンパニー」は、当初は外部事業者の指導も受けて市場調査や分析を行い、商品開発をしてきた。平成28年度より学級担任が中心となり、これまでの活動の流れを確認しながら学習計画を立てている。

1年間の流れは①杉四カンパニーの立ち上げ（事業の概要を聞く・地域の方の話聞く）、②各班によるデザイン開発、③商品評価会（学校公開で行われる地域や保護者へ向けたプレゼンテーション）、④商品決定（デザインの確認）、社長・副社長の決定、⑤事業計画・役割分担、⑥販売価格・販売個数の決定、⑦資金調達、⑧販売準備・販促準備、⑨商品の包装・販売準備、⑩事前・予約販売、⑪学校公開にて地域の方々の協力の下で行われる販売活動、⑫決算・振り返り（売上金と借入金の精算）、⑬活動の振り返り及びまとめ、⑭利益の使い道（例：ユニセフ・南相馬・緑の基金に寄附）、⑮報告会準備・報告会となっている。

以上のように学校支援本部や地域の方々の協力の下に学習が展開されていること、児童が体験を通して「実社会でモノを開発し販売する」こと、地域とのつながりを学べるのが大きな特色である。また、継続して行うことで「4年生になると杉四カンパニー」という形が定着していることも、子どもたちの学びに向かう意識に大きな影響を与えている。

学習・指導と評価の計画（19時間）

時	主な学習活動	主な指導事項
1	・会社の仕組みや販売について知る。	・買う人と売る人について知る。 ・会社の仕組みについて知る。 ・活動する班をつくる。
2	・商品を考える。	・どんな商品がいいか班で考える。
3～5	・商品評価会の準備をする。	・班で考えた商品を評価会で発表する準備をする。
6	・商品評価会を行う。 (販売商品の決定)	・保護者や地域の方に商品をプレゼンする。
7	・決定商品の改善をする。 (実際に実現可能な商品の決定)	・よりよい商品にするためにアイデアを出し合う。
8	・役割分担を決める。事業計画を立てる。 ・企業理念を決める。	・役割、企業理念を決め、事業計画をつくる。仕入値から販売個数、売値等を決める。
9	・模擬会社を立ち上げ、資金を調達する。	・借り入れで資金提供をお願いする。
10・11	・班（会社）ごとに販売準備・販促活動を行う。	・商品の売り方を考え、のぼり、ポスター、チラシ等の作成をする。 ・ポスターやチラシの依頼を行う。
12	・販売活動の準備をする。	・販売する場所の確認、役割分担、お釣りの準備等。
13 14	・販売活動をする。	・予約販売を行う。 ・地域に出て販売を行う。
15	・決算と配当金を決める。	・決算、返済、利益分配の方法と意味を学習し、それぞれの班（会社）で配当金を決定する。
16	・報告文を作成する。	・活動を振り返り、報告文にまとめる。
17	・報告会の準備をする。	・報告会に向けてプレゼンテーションの準備をする。
18・19	・報告会を行う。	・杉八小と合同での報告会を行う。



〈商品評価会の様子〉

地域の実情について、既存の知識と共通体験を通して得た知識を基に、販売したい商品についてプレゼンテーションを行った。プレゼンテーションの内容を企画する際には、自分たちの企画をどのように表現すれば的確に聞き手に伝わるのか、発表内容の順序や手法はどのように構成するのが適切かについて、グループで話し合った。リハーサルを重ねることで、子どもたちは自分たちの企画に自信をもち、「もっとこうすればいいのではないか」といったアイデアを次々に創出するまでになった。そのような創意工夫を凝らしたプレゼンテーションを保護者や地域の方々の参観してもらい、その後、投票で実際に取扱う商品を決定する。

参観者からは、杉四カンパニーに寄せる期待や、地域の一員としてどのように取り組んでいく必要があるかなどについて話していただいた。子どもたちはその期待に応えようと、それぞれの役割を再度確認し、販売活動の準備をした。



〈販売活動の様子〉

地域の商店街の協力を得て、全7か所で販売活動を行った（平成27年度）。実際に地域に出て、まちの人々と触れ合うといった活動を通して、これまでは購買者としてしか関わってきたことがない商店街が、全く別のものを感じたといった感想をもつまでになり、それを活動意欲につなげていくことができた。始めは受け身であった販売活動も、時間が経つにつれ積極的に働きかけることができるようになり、地域の方々の商品購入につながっていった。この活動を通して、子どもたちは、社会で活動するという事は、身近な人々との限定的な関係でのつながりで成り立っているのではなく、多様な他者とのかかわりやつながりを通した上で成立するものであるという本質について気付くことができた。

また、自分たちが実際に社会の一員として自分たちの町で販売という活動を行う機会を得たことにより、この活動が単なる一過性のイベントとして終わるのではなく、地域で生きるといった持続可能な教育に結び付けることができ、自らの将来について考えるなど、生き方について考える教育活動の一環としても、大きな成果を見ることができた。

I
小中一貫教育
理論編

II
総合的な学び
理論編

III
総合的な学び
実践編
就学前

III
総合的な学び
実践編
小学校

III
総合的な学び
実践編
中学校

III
総合的な学び
実践編
特別支援

IV
資料編

(2) 子どもたちの成長

先ほども述べたように、この取組を継続して行うことで、子どもたちには「4年生になると杉四カンパニー」ということが定着してきている。このような地域とのつながりに関わる取組は就学前から系統的に行われており、継続することによって子どもたちの学びに向かう意識に前向きな影響を与えている。

ここで平成 28 年度杉並区「特定の課題に対する調査、意識・実態調査」の結果を示す。これは同個体の推移ではないが、この結果から学年が上がるにつれ、自分が住んでいる地域への興味・関心、意識の高まりが見て取れる。高円寺と他の地域とのつながりや自分の生活との関わりを知り、よりよい高円寺地域を構築していくために、将来、自分たちでできることについて課題意識をもち、解決に向けて考えていく活動に継続的に取り組んできた第6学年は、地域への愛着や地域社会の一員への意識が高い。

表 平成 28 年度杉並区「特定の課題に対する調査、意識・実態調査」の結果より

	小学校第4学年	小学校第5学年	小学校第6学年
今住んでいる地域への関心・関わり			
学校や家の近所で知っている人に会ったときは、自分から挨拶をしている。	61.2%	86.1%	90.9%
今住んでいる地域が好きである。	78.7%	86.1%	91.1%
今住んでいる地域の行事に参加している。	59.6%	66.7%	71.1%
集積的（社会）効力感（相互承認の感度）			
学校での生活は、自分たちが協力することで、自分にとってもみんなにとってもよりよいものにできると思う。	61.2%	83.3%	84.4%
今住んでいる地域は、自分たちが協力することにより、そこで生活する全ての人にとってよりよいものにできると思う。	63.0%	77.8%	64.4%
自分が積極的に関わることで、日本や世界で問題になっていることは、少しでもよい方向に進むと思う。	40.4%	47.2%	51.1%

4 学びのつながり、人の生かし合い

(1) 学びのつながり

ア 学校と社会をつなぐ学び（社会に開かれた教育課程）

「杉四カンパニー」は本校の第4学年が総合的な学習の一環として取り組んでいる学習である。平成 24 年度からスタートして、現在5年目である。本校では、生き方を学ぶ教育活動として、第3学年で地域の方とともに町をめぐり、オリジナルのカルタづくりをする「高円寺カルタ」の取組から始まり、第4学年で「杉四カンパニー」、第5学年で「米づくり」と段階的に学習を進め、第6学年では「僕の夢・私の夢」として自らの将来を思い描いたり、それをより具体化するためのミニ職場体験を行ったりしている。これらの取組の根底には「地域・高円寺」とのつながりを意識させ、その中で子どもたちが多様な他者と向き合い、よりよい社会の形成者としての資質・能力を育んでいくという目的が一貫して設定されている。

これまで育んできた地域と学校との在り方を踏まえて、冒頭に触れた社会の加速度的な変化に対応することが、これからの地域振興に必要なことであり、2030 年を生きる子どもたちに身に付けさせたい力となる。そこで、「社会に開かれた教育課程」の視点に立ち、社会の変化に向き合い適切に対応していくため、学校教育を通じて育むべき資質・能力を教育課程全体の構造の中でより明確に示していく。地域めぐりから始まり、地域と自らの関わりについてスパイラルに取り入れ、子どもたちが自らの地域での役割を確実に意識できるよう、生活科・総合的な学習の時間のみならず、教育課程の全体を念頭に置きながら日々の教育活動を展開していく。

イ 系統性・連続性を確保した学び

①指導目標・内容(事項)の【系統性】

(1) 日常生活や社会と向き合ったときに湧き上がってくる疑問や関心に基づいて、自ら課題を見付け、(2) そこにある具体的な問題について情報収集し、(3) その情報を整理・分析したり、知識や技能に結び付けたり、考えを出し合ったりしながら問題の解決に取り組み、(4) 明らかになった考えや意見などをまとめ・表現し、それからまた新たな課題を見付け、更なる問題の解決を始めるといった学習過程を発展的に繰り返していく。この展開枠は、中学校での取組においても継承され、義務教育9年間を通した連続性が確保されていく。

②学習と評価の方法の【連続性】

総合的な学習の第3学年から中学校第3学年までの7年間のスパンにおいて、地域とのつながりを軸に評価していく。具体的には、以下の視点を基に形成的評価を進める。

学年	内容	評価の視点
小3	高円寺カルタ	高円寺という地域に関心をもち、意欲的に調べることができる。
小4	杉四カンパニー	高円寺地域で商品を通すことを通して商店街の理解を深める。
小5	米づくり	山形の米が高円寺地区で売られていることを知り、販売や流通について理解する。
小6	僕の夢私の夢	地域の方の話やミニ職場体験等を通して、将来、高円寺地域でどう生きていくか、どう生活していくかを考える。
中1	職場訪問	高円寺地域の公共施設や商店等を訪問し、地域理解を深める。
中2	職場体験	職場訪問を基に、職場体験を行うことで、仕事に対する理解を深める。
中3	ボランティア活動等	これまでの体験を基に創造的、協同的に地域の課題の解決に取り組む態度を養う。

③教科等横断的な学び

教科等横断的な学びとは、1つの単元が複数の教科等にわたって構想・展開されるものと捉えることができる。したがって、単元構成によっては、複数の教科が縦につながることも含むものとした。教科横断的な学習のカリキュラム開発上の主な効果としては、次のことを考えた。

- 子どもを大切にしたいカリキュラムづくりを進める視点をもつことができる。
 - 一つの学習成果を他の学習に生かそうとする姿勢をもつことができる。
 - 教科等のねらいや評価規準を明確にもつようになる。
 - 活動等の重複を避け、時間を効果的に活用することができるようになる。
- これらによって、各教科等の学びの相乗効果を高め、「知の総合化」を図ることができると考えた。

④主体的・対話的で深い学び

ICT を活用した協働学習は、学級全員の意見を共有する機会をもつことができるため、人との関わりの中で自己の学びを構成していくことができる。これにより、従来の学習形態では発言できずに埋もれていた子どものよい意見を取り上げることが可能になるだけでなく、全員の意見を比較・関連付けて議論することが可能である。一人一人の子どもが他者の考えを参考にし、自分の考えを高めたり、新たな考えを創出したりすることも促進されると考える。

(7) 一斉学習

事業の概要について、画像や動画を活用した分かりやすい授業を行うことにより、児童の取組に対する興味・関心を高めることができ、学習意欲の向上につなげることができる。特に、商品知識や販売・流通、収支決算など、この時期の子どもたちには馴染みのない言葉や概念については、紙媒体を中心とした説明だけでなく、ICTを活用し商品開発・販売の仕組みについて理解するのに効果的である。

(イ) 協働学習

商品評価会はプレゼンテーション方式で行い、多く共感を得た内容について商品化を進めていく。その際、聞き手に他のどの商品よりも、そのよさが伝わる内容について各班で話し合い、プレゼンテーションを協働で作成する。このように、ICTが児童の考えを伝える際の補助となり、学習課題を把握して、それぞれの意見をまとめて発表し、伝え合うという一連の学習過程において、学習を効果的かつ効率的に展開していくためのツールとなる。

⑤過去・現在・未来の学びをつなぐ評価

生活科及び総合的な学習の時間の目標を踏まえて観点を定め、評価規準を設定する。その際、「地域とのつながり」の視点を中心に据え設定する。「よりよく問題を解決する資質や能力【資】」「学び方やものの考え方【学】」「主体的、創造的、協同的に取り組む態度【態】」「自己の生き方【自】」の観点について、それぞれ制作物や作文、行動観察によって評価・記録をし、それらを総合したものを記録するなどしていくことで評価の連続性が確保され、よりの確に児童・生徒の実態は引き継がれていく。

(2) 人の生かし合い**ア 学校外**

学校支援本部及び地域の関係機関を中心に取組について協力をお願いしている。今後の高円寺地区の発展という目的の下、保護者、商店や公共施設、自治会等が学校の取組について理解できるよう、学校は、渉外・広報活動について積極的に取り組んでいる。地域の方々をボランティアやゲストティーチャーとして招へいすることで、地域への理解・気付きはより一層深いものになる。その際には、児童・生徒の実態を十分考慮した上で、地域との関わり方について把握していく必要がある。

イ 異校種間

特に第6学年においては、中学校への進学を見据え、主権者教育やキャリア教育の観点から、育てたい資質・能力のつながりについて合同研修会などの場で話し合う必要がある。その際には、年間指導計画上のどの時期においてそのような協働を行うのか、連携関係にある小学校との調整を行う必要もある。また、系統性の理解に基づいた指導方法の連続性の確保については、小学校の取組について十分話し合う必要がある。

ウ 同校種内

杉並区小中一貫連携校である杉並第八小学校と取組内容について共有し、年間指導計画や育てたい資質・能力について一定の整合を図る。

エ 自校内

教材への理解やそれに基づいた教材研究を行う際には、それまでの取組の経緯や児童・保護者・地域の実情について共有した上で、学級や学年の担当間で共通理解を図ることが重要である。その上で取組の継続性についても十分話し合い、持続可能な取組になるよう、内容の見直しを行っていく。

◆◆ 地域を担う未来の人材のために ◆◆

もともと杉四カンパニーは、キャリア教育・企業家教育を指導・支援する業者がいて、その業者の支援のもとに始まった学習でした。当初は、教員の側にも、業者がいろいろ指示を出してくれて、それに沿って進めればよい、といった雰囲気がありました。

4年目になり、業者をお願いする予算は最後となり、学校として自立して学習を進める体制をつくらなければならなくなりました。業者の方には、来年度学校だけで行えるように一年間指導をして欲しいとお願いし、進めました。同時に同じ取り組みを行っている杉八小と合同で報告会を行うことにし、業者を離れて学校が独自に計画して進めることを増やしていきました。以前業者が分析をしていた市場調査は行わないことにし、学校側、担任側が過度の負担にならないようにしました。

杉四カンパニーは現在5年目となり、企業家教育・キャリア教育の実践の一つとして全国から視察にこられることも多くなりましたが、その基本にあるのは「地域とのつながり」です。

自分たちの生まれ育った街、高円寺。高円寺に愛着をもって、高円寺を学び、理解し、つながり、関わってほしい、という願いが根本にあります。そして、総合的な学習の時間で高円寺のことを学んだ子どもたちが、成長して今度は高円寺を担う人材になっていく、それがまた町の活性化につながる。「いいまちはいい学校を育てる」という地域との連携・協働がよく表れている実践だと思っています。

また、5年目となり高円寺中の生徒も杉四小の卒業生は中1から中3まで、全学年の生徒が「杉四カンパニー」を経験した学年となりました。中学生に杉四カンパニーの話をするとき「私たちのときはタオルを売った」「今年は何を売ってるの?」「売り上げはどうするの?」などと話が返ってきました。杉四カンパニーの経験が一人ひとりの生徒の中に残っているんだな、と嬉しく思いました。

課題としては、当事者である第4学年の担任は一年間杉四カンパニーに関わるので、実際にどのように運営していくかが分かるのですが、他の学年の先生方にはなかなか伝わらないという点です。

そこで、昨年度今年度と誰が担任になっても、杉四カンパニーを進められるように資料を残すよう心がけました。また、資金調達や商品作成業者との関係では管理職が関わっていくことが求められます。販売の時などに専科の先生方にも協力していただいています。学年に任せて終わりということではなく、更に学校全体の取り組みとして全職員が意識し、定着させていくことが大切なことと感じています。

高円寺地域の学校の実践として、今後も高円寺という地域を大事にしながら丁寧に実践を進めていこうと思います。

I
小中一貫教育
理論編II
総合的な学習
理論編III
総合的な学習
実践編
就学前III
総合的な学習
実践編
小学校III
総合的な学習
実践編
中学校III
総合的な学習
実践編
特別支援IV
資料編

事例2-3 杉並区立杉並第八小学校（・杉並第四小学校、高円寺中学校）

総合的な学習の時間

単元名

小学校第5・6学年

◆◆ 発見！自分たちの高円寺阿波おどり ◆◆

～自分たちの町を自分たちでつくる力を育てる～

1 2030年を生きる子どもたちに身に付けさせたい力と教師・学校の役割

(1) 杉並区立杉並第八小学校（・杉並第四小学校、高円寺中学校）

東京高円寺阿波おどりは、高円寺地区において、そのシンボルとして大きな位置を占めており、毎年120万人もの人が楽しむ全国的にも有数の大イベントとなっている。本校も地域の一員として東京高円寺阿波おどりを支える活動に長年に関わっており、中でも第5・6学年は、東京高円寺阿波おどりの大きな課題であるごみ問題に正面から取り組んできた。当初はごみの回収や分別を呼び掛ける活動が中心だったが、年々進化を遂げ、平成28年度には散乱防止や美化を呼び掛ける啓発活動、杉並区への臨時ごみ回収を要望する活動等を行うことができた。今では地元からも認知され多くの期待を受ける活動となっている。

東京高円寺阿波おどりに係る様々な課題は、高円寺をふるさととして育っていく子どもたちには切実な課題である。そこで、地域をはじめとする参加者や関係者の課題を解決したいという願いに触れるとともに、自分たちの住む街である高円寺に対して、興味をもって調べたり、目的意識をもって働き掛けたりすることを通して、いっそう自分の街への誇りや愛着をもち、自分たちがこの地域を支え、よりよい街にしていこうとする意識を高めていくことを目指している。

(2) 育成を目指す主な資質・能力

【第5学年】高円寺阿波おどりを支える人々との関わりを通して、それを支える人々の思いや願いや高円寺阿波おどりのよさ、課題などに気付き、地域への愛着を高めることができる。

【第6学年】自分たちの提案したプランを実行していくことを通して、実問題にぶつかりながらその解決を図り、地域への愛着を一層高める。

2 多様で一貫性のある総合的な学びにおける本単元の位置付け

	就学前	小学校			
		第1学年	第2学年	第3学年	第4学年
系統性	自分たちの身近にいる人々と触れ合う	自分たちの身近にいる人々に気付き、地域に対する愛着をもつ		地域の人々の思いや願いに気付き、地域に対する愛着を高める	
連続性	伝統文化 高円寺の地域に親しみをもつ	町に伝わる阿波おどりの文化があることに気付く		地域には歴史があり、様々な出来事が現在の町の様子につながっていることに気付く	
	町づくり 自分が役に立つ喜びを感じる	安全を守っている施設があったり、人々がいたりすることに気付く		地域には商店街があり、様々な人が関わり合って町をつくられていることに気付く	
協働	○家族・保護者	○地域や商店街の方 ○杉並区で働く方 ○杉並区外の方		○ゲストティーチャー	

(3) 東京高円寺阿波おどりの 2030 年について

昭和 32 年に街の賑わいを求めて始まった東京高円寺阿波おどりは、平成 28 年には第 60 回を迎えた。延べ 1 万人の踊り手と 100 万人以上の観客を集める東京の夏の風物詩となっている一方、イベントの規模が年々大規模化していく中で、これらに関わる課題も深刻化している。イベントや開催地である高円寺地域を支える人材が不足し、後継者を育てなければいけないという課題、イベントで出るごみやそのごみに便乗して出されるいわゆる「便乗ごみ」の課題、観光客の多さに対してスタッフが不足し、せっかく来てくださった人への対応ができないという課題、場所取りによるトラブルなどの課題…。

様々な課題を抱えながらも、高円寺阿波おどりの開催を毎年楽しみしている地域の人たちや阿波おどりの各連の人たち、高円寺阿波おどりを運営する人たちは「踊り子と観客が一体となる高円寺阿波おどりは楽しくてやめられない。これからも高円寺の伝統として続けたい。」と考えている。運営する人、踊る人、観る人それぞれの人たちが楽しんでいるからこそ、東京高円寺阿波おどりは毎年盛大に開催されている。

指導の実際では、まず、「自分にとっての高円寺阿波おどりととは何か」を考え、高円寺阿波おどりを捉え直したり、友達の考えを知ったりする。その後、高円寺阿波おどりを支える人々の想いに気付けるような活動を設定する。そして、高円寺阿波おどりの始まりを知ったり、たくさんの人々の働きによって毎年開催されていることに気付いたりすることができるようにしたい。また、高円寺阿波おどりが抱える課題を知り、よりよい高円寺阿波おどりのために自分たちにできることを考え、計画し、実行する学習活動を進める。

2030 年の東京高円寺阿波おどりの担い手を育むことは、学校と地域との共通した願いである。

		中学校			
第5学年	第6学年	第1学年	第2学年	第3学年	
地域の人々の思いや願い、町のよさや課題に気づき、地域に対する愛着を深める		地域の文化や伝統に触れる創作活動を実践し、地域の文化や伝統について主体的に発信する			系統性
町づくりの1つとして発展を遂げてきた阿波おどりの文化があり、本場徳島とのつながりがあったり、様々な課題を乗り越えたりしてきたことに気づき、日本を代表するイベントに成長したことを知る 自分たちも伝統文化の継承や町づくりに参加し、自分たちの住む町をよりよくしようとする計画を立てて、実践する		阿波おどりの踊り手となり、踊り方や着付けの仕方、鳴り物の扱い方などを知り、実践する 踊りを教えてもらったり、着付けをしてもらったりする中で、商店街や地域の人々が阿波おどりの伝統を支え受け継いできていることに気付いたことをまとめ、発信する			伝統文化 町づくり 連続性
○家族・保護者 ○ゲストティーチャー ○地域や商店街の方		○杉並区で働く人 ○杉並区外の方			協働

I
小中一貫教育
理論編

II
総合的な学び
理論編

III
総合的な学び
実践編
就学前

III
総合的な学び
実践編
小学校

III
総合的な学び
実践編
中学校

III
総合的な学び
実践編
特別支援

IV
資料編

3 学びを通じた成長

(1) 子どもたちの活動する姿

①学校公開での保護者・地域の方々へのインタビューとアンケート実施



阿波おどり当日～翌日に街にあふれるごみの問題に気付いた児童。その問題を解決する方法を探るために、学校公開を利用して、保護者をはじめとする地域の方々の意識調査を行いました。

②阿波おどり振興会への活動計画プレゼン (28/6/13)

調べたことを基に、活動方針を考え、プレゼンテーションを行いました。阿波おどり振興協会の方から、活動への参加の許可とアドバイスをいただきました。



③清掃事務所への可燃ごみ臨時回収のお願い(28/7/12)



児童は、阿波おどり翌日に街にあふれる可燃ごみの問題に心を痛めていました。その解決策として、昨年度に続き、阿波おどり翌日の可燃ごみの臨時回収をお願いし、杉並区清掃事務所に承諾していただきました。

④商店街での、ごみ削減啓発呼びかけ(28/7/12)

ごみ問題の解決に向け、地元商店会に協力していただき、インタビューの実施、アンケートの実施、ごみ問題の周知・ごみ削減の啓発、自分たちの活動の広報を行いました。道行く人は児童の呼び掛けに応えてくださる人もいれば、そのまま通り過ぎる人もいて、児童は意識のばらつきを感じたようです。



⑤地元町会長への活動協力要請、新聞社取材(28/7/19)



解決のためには、地元の町会や地域住民の協力が必要だと考えた児童は、地元の町会長さんにごみ問題の現状と自分たちの活動を伝え、協力をお願いしました。

⑥阿波おどり当日の回収ボランティア活動(28/8/27, 28)

他のボランティア団体と一緒に、当日の決起集会を行いました。大学生や社会人のボランティアさんたちに混ざって、杉八小の児童も挨拶をしました。



連日集まる 100 万人もの人たちに対して、阿波おどりのパンフレットを配布しました。パンフレットには自分たちが作成したチラシも挟み込んで活動の広報をしました。笑顔も忘れず、一生懸命に配布していました。



⑦阿波おどりの翌日の様子を確認し、散乱したごみを拾いました。(28/8/29)



翌日、公道にあふれるごみを前に立つ子どもたちの怒りと悲しみに満ちた表情が忘れられません。



(2) 子どもたちの成長

子どもたちが商店街でインタビューをしている時に、「私は杉八小の卒業生です」「みんなの活動を応援しているから是非、頑張ってね」と声を掛けてくださった方がいました。その方々から、高円寺の街のことや阿波おどりの話をいろいろと聞く中で、子どもたちは、自分たちの活動の意義を再確認することができたようです。その後も大きな声を出して活動に取り組んでいました。

なかなか自分に自信をもてず、消極的な子どもが多い学級でしたが、活動を通して、少しずつコミュニケーションの質が高まり、意欲的に取り組む姿もたくさん見られるようになりました。

自分たちが住む街の身近な問題だからこそ、何のために活動を行うのか、誰に何を伝えるのかなどの問題意識や目的意識をもって、取り組むことができます。

自分たちが考えた方法を実行するために、粘り強く解決活動や探究活動に取り組み、自分の体験したことや、これからの高円寺阿波おどりへの関わり方について考えたこと、自分にできることを発信していく中で、子どもたち自身も自分の成長を自覚することができました。



I
小中一貫教育
理論編

II
総合的な学び
理論編

III
総合的な学び
実践編
就学前

III
総合的な学び
実践編
小学校

III
総合的な学び
実践編
中学校

III
総合的な学び
実践編
特別支援

IV
資料編

4 学びのつながり、人の生かし合い

(1) 学びのつながり

ア 学校と社会をつなぐ学び（社会に開かれた教育課程）

学校支援本部の協力を得て、地元の商店街や商店会、地域町内会や地元の団体と連携して学習を進める。教育人材を学習活動に位置付ける際に、外部との折衝（学習の内容や日程の連絡・調整等）が必要である。

また、特に東京高円寺阿波おどり振興協会とは連絡を密に取り、東京高円寺阿波おどりの課題解決への道筋や当日ボランティアへの参加の仕方などを相談して学習を進める必要がある。その際に、学校支援本部に外部との折衝のサポートをしてもらうことで、学習活動に適した地域の教育人材を紹介してもらったり、円滑に連絡・調整を行ったりすることができるなど、教育人材と協働した学習をより推進することができる。

イ 系統性・連続性を確保した学び

①指導目標・内容（事項）の【系統性】

本単元を系統的にみると「地域に対する愛着」が一貫した目標となる。学年が進行するに従い、その目標が広がりや深まりをもつことになる。また、目標を達成するための指導内容（事項）も様々な角度からのアプローチとなる。

小学校低学年では、身近にいる人々や自分に直接的に関わりのある人たちが学習の中心である。

中学年では自分たちで活動を企画し地域の商店街に働き掛ける。

そして本単元の高学年では、地域のよさや課題に気付き、地域をよりよくする活動を考えたり実践したりする活動へと発展する。

中学校ではさらに、伝統を引き継ぎ、文化を実践する主体となることができるようにする。

本単元を通して、地域へ働き掛ける主体者となるための力を育むことが目標である。

②学習と評価の方法の【連続性】

本単元は、探究的な学習活動と体験的な学習活動が中心となる。第5学年では、自分たちの町で毎年開催されている東京高円寺阿波おどりのイベントについて捉え直す。その後、第6学年の児童や地域の方からアドバイスを受け、自分たちの学習課題を設定する。設定した課題を達成するために、地域と関わり、情報を収集したり、計画を修正したりして、活動を進める。

このような学習を進めることができるのは、低学年、中学年で地域に出て学習をしたり、様々な人たちと関わったりする活動を十分に経験しているからである。

低学年では自分の身近な人から、中学年ではゲストティーチャーや地域の方、地域商店街から学び、高学年では地域商店街などから学ぶだけでなく、自分たちから働き掛ける学習に発展する。

中学校段階では、自らが踊り手となることで、より実践的に高円寺阿波おどりに関して深く学び、地域の方と協働して学習を進める。9年間を通して地域と共に学習をする中で、より主体的に探究する力を高められるようにする。

③教科等横断的な学び

【国語】●単元名「パンフレットをつくろう」

学習した内容を国語のパンフレットづくりの学習と関連させて、「阿波おどりパンフレット」や「高円寺の紹介パンフレット」を作成する活動を設定することができる。

【社会】●単元名「願いを実現する政治」

高円寺阿波おどりの課題の一つである便乗ごみの解決に向けて、地域住民の願いとして杉並区（行政）に働き掛ける実践的な活動を設定することができる。

【道徳】 ●価値項目「伝統と文化の尊重」

●価値項目「国や郷土を愛する態度」

●価値項目「勤労・公共の精神」

高円寺阿波おどりの学習の進み具合に合わせて活動の事前や事後に意図的にこれらの項目を設定することで、道徳の学習と総合的な学習の時間が相互に関わり合っ、よりよく学ぶことができる。

【学習発表会】

学習の過程や成果を舞台発表で表現したり、画用紙や模造紙の作品にしたりして掲示することで、自分たちの学習の様子を発表することができる。この活動には、活動の報告と地域への啓発活動の意味合いも込めることができる。

【運動会・体育祭】

阿波おどりを全校ダンスや表現運動の民舞として取り入れることで、学校と地域が一体となった演目を設定することができる。

【文化祭】

地域と協働して、阿波おどりの文化的な側面に触れたり、伝統を継承する意味を強くして学んだり踊ったりすることができる。

④主体的・対話的で深い学び

本活動では、児童自らが見いだした課題を解決するために活動するので、主体的な学びになる。また、その課題を解決するためには、児童同士のみならず、阿波おどり振興協会の方々や地域・商店街などの関係する多くの方々と直接顔を合わせ、表情や言葉の抑揚、強弱等を感じながら、対話的に学習を進めていくことが求められる。その活動の中で、効果的に ICT を活用することで、より主体的・対話的で深い学びを実現することができる。

⑤過去・現在・未来の学びをつなぐ評価

ポートフォリオ評価、パフォーマンス評価、プロダクト評価、プロジェクト評価などの評価方法を発達段階や学習内容に合わせて効果的に行い、指導に生かすことができるようにする。

(2) 人の生かし合い

ア 学校外

- 学校支援本部の協力を得ながら、それぞれの団体と連携を図り学習を進めている。
 - ・ 東京高円寺阿波おどり振興協会
 - ・ 地元の商店街や商店会
 - ・ 地域町内会や地元の団体
 - ・ 杉並区役所 環境部ごみ減量対策課

イ 異校種間

- それぞれの校種で東京高円寺阿波おどりに関わっている経験を生かし、情報共有することで学びを深める。
 - ・ 子供園が主体で参加している連の指導を子供園・小学校の教員が協働して行う。
 - ・ 小学校の取組に中学生がボランティアとして参加する。
 - ・ 中学校の創作演技の指導を小学校・中学校の教員が協働して行う。

ウ 同校種内

- それぞれの学校の実践の報告会を定期的実施し、成果や課題を共有し、次の活動に生かす。
 - ・ 2校それぞれのグループが交流し、お互いの活動について助言し合う。

I	小中一貫教育 理論編
II	総合的な学び 理論編
III	総合的な学び 実践編 就学前
III	総合的な学び 実践編 小学校
III	総合的な学び 実践編 中学校
III	総合的な学び 実践編 特別支援
IV	資料編

◆◆ 地域に根ざしたカリキュラムがあること ◆◆

杉並第八小学校で「東京高円寺阿波おどり」をテーマに総合的な学習の時間を中心に取り組み始めて5年が経つ。活動を続けていく中で、内容の充実だけでなく、地域とのつながりが深まり、子どもたちの意識も変わってきている。

「東京高円寺阿波おどりの単元創作の経緯」

(平成21年度～平成25年度杉並第八小学校勤務 畝尾宏明)

地域を舞台にして子どもを育てる総合的な学習の時間の学習対象として、東京高円寺阿波おどりに常に着目していました。学校支援本部に依頼して、東京高円寺阿波おどり振興協会を紹介してもらい早速、商店街の一角にある事務所を訪ねました。

一方で子どもたちに阿波踊りについてアンケートを取ってみると「阿波踊りをやってみたい・続けたい」とは思っている子どもは少なく、中には「阿波踊りは続いてほしくない」と考える子どももいました。ボランティアの不足やごみ問題など、阿波踊りに関する課題について子どもが知らないという現状も明らかになりました。

私はこのギャップに驚くとともに、振興協会の方々の思いと、阿波おどりの抱える問題を子どもたちに出会わせて単元創作することで、子どもたちが地域への愛着を更に高めると確信したのです。

「単元に取り組んだ教員の感想」(平成21年度～平成25年度杉並第八小学校勤務 室岡裕太)

東京高円寺阿波おどりの実践は、子どもたちの達成感、満足感は日々の授業とは違うものだったと思います。担任としても大きな達成感を得ることができたのも、多くの方々の協力があったことだと感じています。



この実践を引き継いだ時は、かなり大変だと思いました。しかし、どんな形であれ、地域とつながったこの活動を自分の代で無くすことは全く考えていませんでした。必ず子どもたちの学びと成長につながると考え、何よりも本校の子どもたちがこの活動にどう取り組むが楽しみでもありました。

子どもたちとの話し合いの中で、今までとは違うアプローチの仕方を考え、新しいアイデアもたくさん出ました。それらを実践するために、地域の方々や保護者、学校など多くの方に協力していただき

ました。子どもたちも苦労したと思いますが、その努力の中で大きく成長することができました。

この実践のよさは自分たちの考えを最大限生かした活動ができることです。どんな形であれ、地域で花開いた東京高円寺阿波おどりの実践は、杉並第八小学校の伝統として続けてほしいと願っています。

「保護者の願い」(杉並第八小学校元 PTA 会長 鳥切智予美)

毎年たくさんの人で賑わう東京高円寺阿波おどり。でも、楽しくて華やかな部分だけではない阿波おどりのごみ問題に子どもたちが気付き、自分たちに何ができるかを考えてきました。何をしたいのかどうしたらいいのか、クラスのみんなで考え意見を出し合っていく中で、考えが合わないこともあり壁にぶつかり悩んだこともありましたが、同じ目標に向かっていく中でお互いの考えを尊重し合い助け合えるようになっていきました。自分たちの言葉で人に伝える事の難しさを学びながら仲間と協力して発表できたことは、子どもたちの自信につながったのではないかと思います。

暑い中、クラスの仲間と協力しごみを回収分別しましたが、一人ひとりが出す少量のごみも、集まるとすごい量になることが分かり、自分たちの日々の心掛けが大切なのだ気付いていました。やりきった子どもたちの顔はとても輝いており一緒に汗を流して活動できた事が保護者としてもとても誇らしく思いました。

子どもたちがこの街に住む1人として東京高円寺阿波おどりに関わり、汗を流した事はとても大切な時間であったと思います。杉八小の子どもたちが毎年この問題を引き継いで活動していくことで、自分たちの住む街高円寺について考えられることにとても感謝しています。この経験を生かし、これからも感謝の気持ちを忘れずに自分たちに何ができるのかを考えながら成長して欲しいと思います。



「阿波おどりへの取り組みに期待すること」(杉並第八小学校 保護者 松谷寿)

杉並第八小学校の子どもたちによる阿波おどりに対する活動を、現在高等学校1年の娘の代から見してきました。始めは「ごみ集めのお手伝い」でした。それが回を重ねるごとに、子どもたちの考察が深くなり、今年は「便乗ごみ問題」への取組にまで発展しました。

地域との連動性も強くなり、「学校教育×地域教育×家庭教育」の総合学習を生み出しています。この活動を体験して育つ子どもたちが、10年後、20年後、どのように社会に貢献・寄与する人間になっているのか。高円寺で子どもを育てる親として、とても楽しみです。

事例2-4 杉並区立西田小学校（・桃井第二小学校、松溪中学校）

生活科・総合的な学習の時間

単元名

小学校第2学年

◆◆ 西田遺産登録！ ◆◆

～まちの宝物を見つけてガイドツアーをしよう～

1 2030年を生きる子どもたちに身に付けさせたい力と教師・学校の役割

(1) 杉並区立西田小学校（・桃井第二小学校、松溪中学校）

本単元は生活科の「まち探検」を発展させたもので、地域の関係施設等を調べるのではなく、地域のよいところや大切に思うこと、守りたいことを調べ、広報するものである。本校がユネスコスクールであることから世界遺産(文化・自然遺産)と関連させて「西田遺産」として登録し、保護者や地域の方はもちろんのこと、杉並区内の人にも伝えようと呼び掛ける。

まちのよさには「場所：自然・建造物・景観、物：産業・祭り、人：名人」等が考えられるが、児童が捉えたよさは点と点の関係にあり、それらの点を結んでガイドツアーを組み、土曜授業等を活用して保護者や地域の方に参加してもらうことで発表の機会とする。調べ学習の際には郷土博物館学芸員との連携や、教育委員会発行の「文化財めぐりマップ」等の活用、都市整備部まちづくり推進課や緑公園課との連携を工夫し、関わりの場を増やすことが有効であるとする。

(2) 育成を目指す主な資質・能力

- ・課題解決の目的や学習成果を伝える相手を意識しながら取り組んでいる。
- ・課題を解決するための計画を立て、解決への見通しをもって取り組んでいる。
- ・地域のよさを「所・物・人」の視点から多面的に考えようとしている。
- ・自分が見聞きしたこと以外に関係者からの話や杉並区等からの情報も活用している。
- ・インタビューしたことや友達が調べた情報を比較し、違いを整理しながら話し合えることができる。
- ・学習を通して地域のよさを知るとともに、地域に愛着をもつことができる。
- ・地域に住む一員として地域のよさを守るために関わろうとする意識をもつことができる。

2 多様で一貫性のある総合的な学びにおける本単元の位置付け

	就学前	小学校			
		第1学年	第2学年	第3学年	第4学年
系統性	自然に触れて感動する体験を通して関心を高める。	自分や友達よさに気づき、意欲をもって活動する。		自分も相手も大切にし、失敗を恐れずに挑戦する。	
連続性	学習形態	身近な動植物に心を動かされる中で、生命の尊さや不思議さに気付くようになる。		グループ学習を通して、友達と助け合ったり、協力し合ったりすることで、友達が支えてくれていることや友達の力になれるということに気付かせる。	
	発信	1つの発問に複数の児童が発表するようにし、発表の機会を増やす。		考えを児童と別の児童が発表することで、友達の考えを理解しようとする態度を育てる。	
	学び合い	上手な児童が手本を見せる「ミニ先生」になり、自尊感情を育てる。		「ミニ先生」として苦手な児童にアドバイスする。理解者の存在に気付いたり、貢献意識を高めたりさせる。	
協働	○家族・保護者	○すぎなみ環境ネットワーク ○杉並区まちづくり振興課、緑公園課、杉並区立郷土博物館			



(3) サステナブルスクール西田小学校の取組

○ユネスコ NISHITA ESD 子供報告会の実施 (平成 29 年 2 月 25 日)

「子どもたちが 1 年間の学習を振り返り、個人の成果を発信するとともに、前後の学年の発表を見合い、次年度の学習についての目標をもつこと」、また「保護者や地域、関わってくれた関係諸機関に発信することで、学びの深まりや成長を受け止め、励ます関係づくりを培うとともに、学習に協力する地域体制 (関わり) を強くすること」を目的として実施している。

当日は、地域・保護者だけでなく、ESD 関係諸機関の方など多くの方の参加があり、子どもたち一人ひとりが学びを深めることができた。

本校の ESD の取組では、調べたことや学んだことを発信することを重視している。発信する対象によって何を調べるか、どうやってまとめていくかなど、学び方が変わってくるからである。引き続き、ESD カレンダーを基に、子どもたちが目的意識をもって主体的に問題解決に取り組む活動を通して、持続可能な社会をつくるために必要な資質・能力を育んでいきたい。

【平成 28 年度の取組】

- <第 1 学年> 「もりとなかよし」
- <第 2 学年> 「わたしの町はっけん! (西田遺産)」
- <第 3 学年> 「自然とともに暮らそう」
- <第 4 学年> 「みんなに優しい町づくり (人権・福祉)」
- <第 5 学年> 「日本のよさを知り西田から世界に発信しよう」
- <第 6 学年> 「世界に向けて羽ばたこう」

		中学校			
第 5 学年	第 6 学年	第 1 学年	第 2 学年	第 3 学年	
自分を認め、他人を認め自信をもって諦めずに取り組む。		自分を認め、他者に思いやりの気持ちをもって接し、望ましい人間関係を築く。			系統性
→		ペアやグループ活動を通して、考えを出し合うことで、互いの価値観が違うことに気付き、違いを認めることで互いが豊かになることに気付かせる。			学習形態
→		広く他人の考えに触れ、他者の考えを受け止め、互いに認め合うようにする。			発信
課題設定→予想→自分の考えという学習の流れの中で、互いの考えを肯定的に認め合うことができるようにする。		教え合いや認め合いを通して、協力・信頼の姿勢を育む・予想を立て自分で調べたり、友達の意見を基に考えたりしながら、課題を解決する。			学び合い
○家族・保護者		→			協働
○すぎなみ環境ネットワーク		→			
○ユニクロ、オイスカ等の外部団体		→			
○環境教育の専門家		→			
		○地域在住の方			→

- I 小中一貫教育 理論編
- II 総合的な学び 理論編
- III 総合的な学び 実践編 就学前
- III 総合的な学び 実践編 小学校
- III 総合的な学び 実践編 中学校
- III 総合的な学び 実践編 特別支援
- IV 資料編

(2) 子どもたちの成長

○子どもたちのガイドツアーに参加した保護者から多くの感想をいただきました。

西田遺産の候補選びから、最終的に自分自身がガイドになって説明を行うところまで、一貫して子どもたちの考えや自主性が尊重されており、とても良いことだと感じた。それぞれの個性あふれる発表を聞き、冊子やビデオで学ぶような地域学習とは異なる大きなものを学んでくれたのだと、嬉しく思った。

各自が役割をもって上手に解説してくれたことは嬉しい驚きだった。途中の道でもグループとしてまとまって歩く姿は、子どもたちがルールをわかまえていることを実感させてくれた。天気にも恵まれ、授業参観とは異なる雰囲気楽しさも、ぜひまたこのような機会を設けていただければと思う。

自分たちで調べて、聞いて、思ったことをうまくまとめていたと思う。住んでいる地域のことを知ることは大切だと感じているので、このような学習は続けていってほしい。

生活科では毎年「町探検」を行っていたが、地域を教材に「西田遺産」を考え、発信するプログラムに作り変えたことで、子どもたちの取り組む姿勢が変わった。ガイドツアーを行うことや、みんなが選んだ「西田遺産」を基にカレンダーを作ることなど、学習成果を生かすというゴールが明確であったことが、子どもたちの意欲を高めたのだと考えられる。また、子どもたちの感想には、「他のクラスの発表を聞くことができよかった」「同じ場所でもおすすめのポイントが違って楽しかった」など、学び合いのよさに着目したものも多かった。

この活動を通して、各自が発表内容に誇りをもち、地域への愛着をもつようになったと感じる。西田遺産を考える活動は、生活科のねらいも、またESDとしてのねらいも達成できたのではないかと。

○他学年の取組より “届けよう、服のチカラ” プロジェクト

第6学年では、ユニクロのCSR「届けよう、服のチカラ」プロジェクトへ参加する。ユニクロの社員から難民問題についての説明を受けた後、古着を回収する趣旨や協力を依頼する文章を作成し、回収ボックスの飾り付けやポスターの作成なども分担しながら行った。協力を依頼したのは、全校児童の他、近隣幼稚園や保育園、松溪中学校、児童館等、10の関係諸機関で、児童が実際に赴いてお願いして回った。

特に小・中の協働として、松溪中学校からはエコキャップの回収を依頼されて協力していることもあり、古着回収は小学校側からの協力依頼となる。松溪中学校では生徒会が代表で今回の取組の意図の説明を聞いてもらい、全校生徒に古着回収への協力を呼び掛けてくれた。

回収期間は僅か2・3週間であったが、大きい段ボール41個分になり、体育館で敷き詰めた子ども服を見て、子どもたちは改めて充実感を得るとともに、自分たちの働き掛けに応えてくれる保護者や地域の温かさを味わうこととなった。

西田小学校で「届けよう、服のチカラ」プロジェクトを体験した児童が、来年は松溪中学校の生徒として、小学生の依頼に応える立場となる。持続可能な社会はこうした双方の立場を体験することで築かれていく。



I
小中一貫教育
理論編

II
総合的な学び
理論編

III
総合的な学び
実践編
就学前

III
総合的な学び
実践編
小学校

III
総合的な学び
実践編
中学校

III
総合的な学び
実践編
特別支援

IV
資料編

4 学びのつながり、人の生かし合い

(1) 学びのつながり

ア 学校と社会をつなぐ学び（社会に開かれた教育課程）

- 取材活動には関係者や所有者と関わる他、文化財に関しては郷土博物館やまちづくり推進課や緑公園課とも連携する。発表物（ポスター・遺産めぐりマップ）の掲示や配布にも地域の協力を得る。

イ 系統性・連続性を確保した学び

①指導目標・内容（事項）の【系統性】

- 第3学年の「杉並区の学習」では、学校の周りの様子や位置関係、特徴を捉える学習に発展する。
- 「安全マップづくり」や防災教育においても、児童が地域の状況を把握しておくことが大切である。

②学習と評価の方法の【連続性】

学習形態や発表の仕方、学び合い、問題解決の方法について連続性を確保して指導していく中で、子どもたちが自分の立場を明確にして学びを深めていけるようにする。

- 「分からない」「できない」ということが言える雰囲気を作り、できることからやってみようという気持ちと「できた」「分かった」という成功体験を積み重ねられるようにする。
- 他の人と違うということが「恥ずかしい」と思わないよう、多様な価値観があることを理解できるようにする。

③教科等横断的な学び

【ESD カレンダー】

ESD カレンダーとは、西田小学校がユネスコスクールとして取り組むESD（持続発展教育）の内容を、それぞれの学年の学習にどのように位置付けているかを表したものである。「環境」「国際的な協力」「多文化の理解」「人権・命の教育」という四つの視点を大切にしながら、学習を教科横断的に関連付け、様々な教科等で学んだことを次に生かしながら学びを発展させていけるように作成している。

※ESD カレンダー例

平成28年度 西田小学校 <研究主題>「学び合い 高め合う」授業づくり ～ESDの視点を通して～

第4学年 ESDカレンダー

教科領域	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
国語		新聞を作ろう		自分の考えを伝えるには		だれもが関わり合えるように～手と心で競べ～						十年後のわたしへ
算数		折れ線グラフ	【まどめる】			整理のしかた		クラブ活動リーフレットを作ろう				
理科						がい数を使った計算						自然の中の水
社会	郷土の発展につくす	くらしをささえる水										
特活			ごみのしまつと再利用									
総合		《環境》 未来の地球を守ろう				《福祉》 ユニバーサルデザイン/ブラインドサッカー/聴覚障害				《誕生学》 1/2成人式		
道徳	あしたにトライ 【勤勉・努力1-（3）】					点字メニューにちょうせん 【奉仕4-（2）】	心を結ぶ1本のロープ 思いやり・親切【2-（2）】	オトちゃんルール友情・信頼・助け合い【2-（3）】				
音楽						周りの人にありがとう 尊敬・感謝【2-（4）】				ぼくの生まれた日 生命尊重【3-（1）】	かけがえのない命 生命尊重【3-（1）】	
図工						リサイクル工作						
体育						オリンピック・パラリンピック教育						育ちゆく 体とわたし
行事	遠足（羽村取水堰）				社会科見学 （ガスてな一に？・虹の下水道館）							

【国語科】

国語科の作文指導や話すこと聞くことの学習と関連させ、自分が取り上げる地点の推薦理由や見所、歴史など多面的に取材し、分かりやすく伝えるなど既習の事項を活用・応用することを大切にしている。

※本取組と関連する国語科の単元 * 「自分発見」がねらい。

小学校	第1学年	第2学年	第3学年	第4学年	第5学年	第6学年
主な単元	【話す・聞く】 友達に、聞いてみよう		【話す・聞く】 伝えたいことを発表しよう 「大好きなもの、教えたい」		【話す・聞く】 進行を考えながら話し合おう 「伝えよう、楽しい学校生活」	
内容	ア 身近なことや経験したことなどから話題を決め、伝え合うために必要な事柄を選ぶこと。 イ 相手に伝わるように、行動したことや経験したことに基づいて、話す事柄の順序を考えること。 ウ 伝えたい事柄や相手に応じて、声の大きさや速さなどを工夫すること。 エ 話して知らせたいことや自分が聞きたいことを落とさないように集中して聞き、話の内容を捉えて感想をもつこと。 オ 互いの話に関心を持ち、相手の発言を受けて話をつなぐこと。		ア 目的を意識して、日常生活の中から話題を決め、集めた材料を比較したり分類したりして、伝え合うために必要な事柄を選ぶこと。 イ 相手に伝わるように、理由や事例などを挙げながら、話の中心が明確になるよう話の構成を考えること。 ウ 話の中心や話す場面を意識して、言葉の抑揚や強弱、間の取り方などを工夫すること。 エ 必要なことを記録したり質問したりしながら聞き、話し手が伝えたいことや自分が聞きたいことの中心を捉え、自分の考えをもつこと。 オ 目的や進め方を確認し、司会などの役割を果たしながら話し合い、互いの意見の共通点や相違点に着目して、考えをまとめること。		ア 目的や意図に応じて、日常生活の中から話題を決め、集めた材料を分類したり関係付けたりして、伝え合う内容を検討すること。 イ 話の内容が明確になるように、事実と感想、意見とを区別するなど、話の構成を考えること。 ウ 資料を活用するなどして、自分の考えが伝わるように表現を工夫すること。 エ 話し手の目的や自分が聞こうとする意図に応じて、話の内容を捉え、話し手の考えと比較しながら、自分の考えをまとめること。 オ 互いの立場や意図を明確にししながら、計画的に話し合い、考えを広げたりまとめたりすること。	
中学校	第1学年		第2学年		第3学年	
主な単元	【話す・聞く】 多様な視点から好きなものを紹介しよう 「スピーチをする」		【書く】 表現のしかたを工夫して書こう 『ある日の自分』の物語を書く」		【話す・聞く】 深まる学びへ 社会との関わりを伝えよう 「相手や目的に応じたスピーチをする」	
内容	話すこと・聞くこと的能力を育成するため、次の事項を身に付けることができるよう指導する。 ア 目的や場面に応じて、日常生活の中から話題を決め、集めた材料を整理し、伝え合う内容を検討すること。 イ 自分の考えや根拠が明確になるように、話の中心的な部分と付加的な部分、事実と意見との関係などに注意して、話の構成を考えること。 ウ 相手の反応を踏まえながら、自分の考えが分かりやすく伝わるように表現工夫すること。 エ 必要に応じて記録したり質問したりしながら内容を捉え、共通点や相違点などを踏まえて、自分の考えをまとめること。 オ 話題や展開を捉えながら話し合い、互いに発言を結び付けて考えをまとめること。		書くことのできる能力を育成するため、次の事項を身に付けることができるよう指導する。 ア 目的や意図に応じて、社会生活の中から題材を決め、多様な方法で集めた材料を整理し、伝えたいことを明確にすること。 イ 伝えたいことが分かりやすく伝わるように、段落相互の関係などを明確にし、文章の構成や展開を工夫すること。 ウ 根拠の適切さを考えて説明や具体例を加えたり、表現の効果をj考えて描写したりするなど、自分の考えが伝わる文章になるように工夫すること。 エ 読み手の立場に立って、表現の効果などを確かめて、文章を整えること。 オ 表現の工夫とその効果などについて、読み手からの助言などを踏まえ、自分の文章のよい点や改善点を見いだすこと。		話すこと・聞くことのできる能力を育成するため、次の事項を身に付けることができるよう指導する。 ア 目的や場面に応じて、社会生活の中から話題を決め、多様な考えを想定しながら材料を整理し、伝え合う内容を検討すること。 イ 自分の考えや根拠を明確にし、相手を説得できるように論理の展開などを考えて、話の構成を工夫すること。 ウ 場の状況に応じて言葉を選ぶなど、自分の考えが分かりやすく伝わるように表現工夫すること。 エ 話の展開を予測しながら聞き、聞き取った内容や表現の仕方を評価して、自分の考えを広げたり深めたりすること。 オ 進行の仕方を工夫したり互いの発言を生かしたりしながら話し合い、合意形成に向けて考えを広げたり深めたりすること。	

I 小中一貫教育
理論編

II 総合的な学び
理論編

III 総合的な学び
実践編
就学前

III 総合的な学び
実践編
小学校

III 総合的な学び
実践編
中学校

III 総合的な学び
実践編
特別支援

IV 資料編

◆◆ 子どもの学びに火を付ける ◆◆

<子どもの学びに火を付ける課題提示>

- 駅に行くと各地の観光を紹介するポスターが視界に入る。これらのポスターを提示し、どのような学習が始まるのか子どもの興味・関心をもたせる。
- 興味を喚起する各地の景観やアトラクションを提示し、比較するなかで、地元にも人に伝えたい場所やものはないかと呼び掛ける。
- テレビのCMで流れるプロモーションビデオを見ながら、どのように広報するかを話し合わせる。「そうだ、西田に行こう!」をキャッチフレーズに自作のプロモーションビデオを作ったり写真展やポスターを作ったりするなど、成果物をイメージさせることで児童に目標をもたせる。

<子どもが気付く学習の視点>

- 早速取材に取り掛かりたい児童の気持ちに待たせかけ、日本にも世界遺産というユネスコの取組があることを知らせ、学習に深まりをもたせる。
- どんなものが世界遺産に当たるのかは教えるのではなく、カードを分類させ、相違点や共通点を考えさせる活動を通して、世界遺産の多様性と人類の宝として守ろうとする万国共通の思いに気付かせる。
- 世界遺産を調べる中で、なかなか登録されないことも知ることになる。その上で取材活動に取り掛かり、登録するためにはどんな内容をまとめ、アピールしたらよいかを思考させることが大切である。

<伝えたいと思う前に自分たちから楽しむ学びへ>

- 2年生の実態から考えると、児童が知る地域情報には限りがある。児童が使う身近な公園も紹介する対象に認めながら、地域に着目させる。
- まずは地域探検を全員で行い、施設関係者の話や周囲の景観に気を付けながら西田遺産の候補地をリサーチすることで、児童が自主的に学習するための見通しをもたせる。
- 荻窪南界隈には文化財も多く、別日に郷土博物館に協力を仰ぐ機会を作ったり、杉並区の「史跡散歩地図」や「すぎなみ景観ある区マップ」も活用したりして、「行ってみたい」「調べてみたい」という気持ちをもたせる。
- 保護者にも協力を求め、グループごとに現地で調べる機会を作る。時間があればもう一度全員で地域を周り、調べた内容を紹介し合う時間を作るとガイドのイメージがもてる。
- 土曜授業を活用し、幾つかの箇所をまとめて西田遺産のガイドツアーを実施する。保護者は安全面に留意しつつ、ガイドされるお客役も担ってもらい、相手意識をもたせる学習の場にする。

<学習における ICT の活用>

- 世界遺産についてはNHK for Schoolでも配信されており、グループに分かれてタブレット端末で何度でも視聴することができる。
- 取材活動にタブレット端末を持参することで、写真や説明を受けた際の動画も撮ることができ、学級でプレゼンをする際にも提示することもできる。
- カメラで撮った写真をプリントしマーカー等で飾り付ければ、独自のフリップとして活用できる。
- ガイドツアーの際にタブレット端末を持参することで、中に入れないう箇所を見せながら説明することができる。

<振り返りは自己肯定感と社会貢献の視点で>

- 学習成果を人に発信し、役立ててこそ価値が出る。ガイドツアーに参加した保護者からの声を読ませ、自分たちが働き掛けた成果を実感させたい。

本校の単元計画例

第6学年 総合的な学習の時間		世界に向けて羽ばたこう (単元計画/全35時間)						
戦争の平和について知る	<p>学習活動①ユニクロ主催「服のカプロジェクト」について知る。(2時間)</p> <p>学習活動②着られなくなった服を集める計画を立てる。(2時間)</p> <p>○道徳(国際理解)：難民問題など、世界で起こっていることについて知り、現在行われている平和維持活動について知る。</p> <p>----- 留意点 -----</p> <p>・服のカプロジェクトの方々の話を聞き、活動の重要性を知るとともに、学習の進め方について見通しをもたせる。</p>	<p>学習活動③校内や近隣施設へ協力を呼び掛け、服を集める活動に取り組む。(7時間)</p> <p>○社会(長く続いた戦争)：日本の戦争の歴史について知る。外国の様々な問題と今の日本を比べた上で、日本の戦争の歴史について学び、戦争について考えていく。</p> <p>----- 留意点 -----</p> <p>・世界が平和であるために協力する活動をする一方で、日本の戦争の歴史における外国との関わりについて知り、世界との関わりについて考えをもたせる。</p>	<p>学習活動④集めた服を届ける準備をし、服のカプロジェクトについて振り返りを行う。(3時間)</p> <p>○国語(平和のとりでを築く)：日本の戦争の歴史から思ったり考えたりしたことを話し合う。</p> <p>----- 留意点 -----</p> <p>・服のカプロジェクトの活動を通して考えたり感じたりしたことを話し合うとともに、活動の意義について考えさせる。</p>	<p>学習活動⑤服のカプロジェクトが世界の平和につながる活動であることに気づき、世界が平和であるために自分たちができることについて考える。(2時間)</p> <p>----- 留意点 -----</p> <p>・自分たちの活動が平和活動の一環であることに気づかせ、自分たちには他にどのようなことができるか考えさせる。</p>	学びに火をつける	調べる	まとめる	伝え合う
	<p>学習活動⑥テレビジョン収容所で書かれた子供の絵と出会い、絵に描かれた過去や思いについて関心を高める。(3時間)</p> <p>学習活動⑦野村さんの講義を聞き、野村さんの活動への思いについて話し合う。(4時間)</p> <p>----- 留意点 -----</p> <p>・野村さんの活動が世界の平和につながる活動であることに気づかせ、次時につなげる。</p>	<p>学習活動⑧今までの学習を振り返って自分の課題として捉え、平和につながる活動にはどのようなものがあるか調べたり考えたりする。(6時間)</p> <p>----- 留意点 -----</p> <p>・服のカプロジェクトや野村さんのお話を振り返り、今自分たちができることや今後すべきことについて考えを深めさせる。</p>	<p>学習活動⑨未来が平和であるために、今できること実践し、振り返りを行う。(3時間)</p> <p>○国語(未来がよりよくなるために)：「戦争」「平和」について意見を聞き合い、未来が平和であるために自分たちができることについて意見文を書く。</p> <p>----- 留意点 -----</p> <p>・今自分たちができることについて計画を立て、実践する。今までの学習を振り返り、未来がよりよくなるために自分の思いをまとめさせる。</p>	<p>学習活動⑩「西田小発 平和宣言2016」を行う。(3時間)</p> <p>来校者へ発表…12/10</p> <p>他学年へ発表…2/10</p> <p>----- 留意点 -----</p> <p>・今までの学習を振り返って、今できることやこれから取り組みたいことについて個々に具体的な考えをもたせる。</p>	未来が平和であるために自分たちが			

I 小中一貫教育 理論編

II 総合的な学び 理論編

III 総合的な学び 実践編 就学前

III 総合的な学び 実践編 小学校

III 総合的な学び 実践編 中学校

III 総合的な学び 実践編 特別支援

IV 資料編

事例2-5 杉並区立久我山小学校（・荻窪小学校）・宮前中学校

総合的な学習の時間、特別活動

単元名

小学校第4学年、中学校第1学年

◆◇ 自分探検 CM から権利の気球まで ◇◆

～人との関わりと相互理解を通じて育む自己肯定感～

1 2030年を生きる子どもたちに身に付けさせたい力と教師・学校の役割

(1) 杉並区立久我山小学校（・荻窪小学校）・宮前中学校

なぜ9年間の学びの連続の中で「自尊感情や自己肯定感を高める」ことが求められているのか。それは一言で言えば全ての子どもたちが自立して社会で生き、豊かな人生を送るためである。そのためには小・中学校が連携を図り、小学校から中学校に進学するときに感じる不安や、学校生活の変化という「壁」も必要な課題と考え、一貫した指導で自ら道を切り拓く力を付けていくことが大切である。

「杉並区小中一貫教育基本方針（平成26年2月）」の中で「小学校、中学校の9年間（児童期～青年前期）は人の成長・発達の中でも、大きな変化が見られる時期であり、この時期の子どもたちが多様な発達課題を克服し、一步一步階段を上るように適切な成長をしていくために、学校教育の果たす役割は大きい。」と書かれている。そこで、9年間で学校、家庭、地域などとの関わりで様々な経験を積むことが大切であり、一人ひとりの多様な力を育てるために、学び合うための場や活動、時間の確保等が必要になる。人として生きるための土台づくりが9年間の学びの連続、小中一貫教育で求められていることだと考える。その土台づくりに大きく影響しているのが「自尊感情・自己肯定感」である。

また、複数の小学校から入学する生徒で構成される中学校では、入学間もなくして人間関係で困難さを感じる生徒が少なくない。望ましい人間関係を形成し、集団の一員として生活することは生涯に渡り必要であり、互いの存在を尊重することができるようになるには、多様性を知り受容できるようになっていく必要もある。そのため、共生の教育は必要不可欠であり、様々な価値観に触れ、本音で語り合うことが、自尊感情を高め、「望ましい人間関係の育成を目指す」ことにつながると考える。

(2) 育成を目指す主な資質・能力

価値の多様化や人間関係の希薄さが進む現代社会においては、性別、年齢、個性、価値観等は多様化し

2 多様で一貫性のある総合的な学びにおける本単元の位置付け

	就学前	小学校			
		第1学年	第2学年	第3学年	第4学年
系統性	身近な人と親しみ、かかわりを深め、愛情や信頼感をもつ。	自分や友達によさに気づき、意欲をもって活動する。		自分も相手も大切にし、失敗を恐れずに挑戦する。	
連続性	友達によさに気づき、一緒に活動する楽しさを味わう。	①自分を知る。 _____ ②他者を認める。 _____ ③自分を振り返る。 _____			
協働	幼児と児童の交流の機会を設けたり、小学校の教師との意見交換や合同研究の機会を設けたりする。	・年間指導計画上の学習の到達目標を共有し、学級や学年の担当間で共通理解を図る。 ・学習到達目標や年間指導計画は、連携関係のある小学校で（ある程度）整合を図る。 ・大学や企業プログラムとタイアップして取り組むなど、より充実した活動を行う。			

自分探検CMを作るう

ており、自他を理解し、互いに認め合い、支え合う生活をしていくスキルが必要であると考えます。

そのためには、他者の様々な考えや立場を理解し、相手の意見を聞いて自分の考えを調整するとともに、自分の置かれている状況を受け止め、役割を果たしつつ他者と協力・協働して社会に関われる大人、よりよい社会の一員として、自己の能力を発揮し、自信をもって前に進んでいけるような大人になってほしいと願っている。また、人と人が関わり合うには、言語活動はなくてはならないものである。東京都教育庁が実施した平成 27 年度児童・生徒のインターネット利用状況調査報告書（下表）から、インターネットを利用している児童・生徒は、8～9割おり、特に、中学生の 67.8%は、友達と連絡を取るために利用していることが分かる。このことから、文字だけのコミュニケーションに慣れている子どもたちにとって、まずは同世代で構成される学校において言語活動を充実させることが必要である。そして、子どもたちが社会に出たとき、自分の意見や考えをしっかりと伝えることができる人、相手の気持ちが分かる人に育つことを期待する。

	小学校	中学校	高等学校
インターネットに接続できる機器を使っていますか。	89.6%	96.0%	97.8%
以下の機器のどれかを使って、インターネットを利用していますか。(ゲーム機・スマートフォン・パソコン・タブレット端末・携帯電話・携帯型音楽プレーヤー)	82.4%	97.1%	99.1%
インターネットをどのような目的で利用しますか。			
家族と連絡を取るため	35.4%	61.6%	69.9%
友達と連絡を取るため	20.9%	67.8%	80.3%

※「平成 27 年度児童・生徒のインターネット利用状況調査報告書」（東京都教育庁）より一部抜粋

		中学校			
第5学年	第6学年	第1学年	第2学年	第3学年	
自分を認め、他人を認め自信をもって諦めずに取り組む。		自分を認め、他者に思いやりの気持ちをもって接し、望ましい人間関係を築く。			系統性
		<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; display: inline-block;">権利の熱気球</div>			連続性
		→			
		→			
④自分を見つめ、自己を高める。		→			
					協働

I
小中一貫教育
理論編

II
総合的な学び
理論編

III
総合的な学び
実践編
就学前

III
総合的な学び
実践編
小学校

III
総合的な学び
実践編
中学校

III
総合的な学び
実践編
特別支援

IV
資料編

3 学びを通じた成長

(1) 子どもたちの活動する姿：小学校

本単元では、「広告小学校」（電通の社会貢献活動教材のプログラム）の第2段階として、自分自身のCMを作成する課題「自分探検CM」に取り組む。

「広告小学校」はコミュニケーション力（伝え合う力）を育成するプログラムであり、子どもたちにとって身近なCMを活用して、伝えたいことを15秒の「CM劇」として表現するものである。

第1段階 「入門CM」

身近な商品（チョコレート）をテーマとして、限られた場所・時間で商品をどのようにアピールしたらよいかというCMづくり、発想方法、グループワーク、表現方法などの基礎を学び、主にグループ活動の中でCMづくりを行った。

「すごく甘い「ABCチョコレート」のCMづくりを通して、「すごく」甘いということをどう伝えるかが課題となる。「これだ!」と思えるアイデアに出会えるまで、グループで考えて、考えて、考え抜くことで発想力を培い、グループ作業での意見の衝突や折り合いを付けることを通して、友達と関わる力や課題解決力を高めることを目指す。そして、作品発表を通して、「伝える側」と「伝えられる側」を経験することで伝え合う力の向上につなげた。

第2段階 「自分探検CM」

授業の最初に「CMは商品の自己紹介」ということを学ぶ。今回は、自分自身をテーマとして、気付かなかった自分のよさや特徴をCM劇で表現した。

自分自身の特徴やよさを見つめ、自分には様々な面があることを発見できるようにする。また、友達と互いのよさを伝え合ったり、自分らしさを認めてもらったりすることで、相互理解の楽しさや人と関わることの喜びから自己肯定感が高められるようにした。

また、たくさん見付けた自分のよさや特徴の中から自分らしさを表現しているものを一つ選び、さらに、「なぜそうなのか」「これからどうしたいのか」といった視点で、徹底して自分のことを考える過程を通して、論理的思考と構成のスキルを培った。

第3段階 「公共CM」

身の回りの課題を発見し、チームで原因を考え、解決方法をCM劇として表現した。

学校や町など、身の回りで見過ごしてしまっている社会の課題を見付ける活動を通して、課題発見力を高めることを目指す。そして、「課題発見」「原因追究」「解決方法を考える」「効果的に伝える」という実社会における課題解決の過程を体験することにより生きる力を培う。

児童は、ささやかなアイデアだとしても、社会を動かす力となるということを感じることができた。

(2) 子どもたちの成長：小学校

自分について考える

「自分らしさ」とは何か。①自分で考える。②友達から教えてもらう。③再度、自分で考える。と段階を追って考えることで、長所だけが自分らしさではなく、短所も含めて自分なんだと考えられる児童が増えた。そして、自分では気付いていなかった自分のよさを知ったり、自分の得意なことや自分のよさのCMを発表したりしたことで、自己を受容することのできる児童が増えるとともに、友達から自分のよさを見付けてもらうことで、自分のよさを認めてくれる友達の存在に気付くことができた。

多くの友達と関わる

「よさ」が書かれた付箋をクラス全員からもらうことで、自分のよさ（特徴）を受け止め、自分らしさの考えを広げることへつながった。また、各教科でペア学習を取り入れたことで、自分の考えを伝えたり、友達の意見を聞いたりする機会が増え、相互理解が深まった。

(3) 子どもたちの活動する姿：中学校

「権利の熱気球」では、自分の価値観を考えることから始まり、友達との価値観の違いに気づき、そのことを認めることをねらいとしている。さらに、それぞれの価値観を話し合うことで、よりお互いを認め合うことにつながる。

学習活動	
導入	<ul style="list-style-type: none"> ・アイスブレーキングで話し合いに向けて互いに雰囲気をつくる。 ・班でのミニトレーニングを行う。 「何が見える？」
展開	<ul style="list-style-type: none"> ・「権利の熱気球」のゲームの内容について、説明を聞く。 (「権利」のカード配布) ・捨てる順番を考える。また、その大まかな理由についても考える。(ワークシート①) ・班で互いの考えを伝え合いながら、班で同じ気球に乗っていたらどうするかを考える。 (ワークシート②) ・また、捨てきれない権利について考える。 <p>【各班からの発表】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・他の人の意見を聞いて、自分の考えが変わった人は、自分の順番を再考する。
まとめ	<ul style="list-style-type: none"> ・本時の活動を通じての感想をワークシートに記入する。 ・記入したことや、感じたことを発表する。

【権利のカード】

【ワークシート】

権利の熱気球 気球が危ない！あなたならどうする？

A きれいな 空気を吸う権利	B 遊ぶ（休養できる） 時間を持つ権利
C 学校に行き、学べる権利	D 毎年、旅行をして休暇 を楽しむ権利
E みんなと異なっている ことを認められる権利	F 正直な意見を言い、 それを聞いてもらう権利
G 命令されない・ 服従させられない権利	H 私だけの部屋をもつ権利
I 毎日、十分な食べ物と きれいな水を得る権利	J 愛し、愛される権利

権利の熱気球 気球が危ない！あなたならどうする？

大変！今、あなたの乗った気球の高度が、下がっていつまでも下がっています。高度を上げるためには、気球に横んでいる大切な荷物を一つずつ捨てていくしかありません。あなたなら、どの順番で捨てていきますか？捨てる順番を考えよう

自分の意見	班の意見
1	1
2	2
3	3
4	4
5	5
6	6
7	7
8	8
9	9
10	10

(4) 子どもたちの成長：中学校

中学校第1学年の中には、小学校での友人関係をそのままに入学し、進学を契機に「友人関係をリセットしたい」「自分を変えたい」と思っている生徒も少なくない。そのため、入学当初は自分の集団内での位置を確立するために必死な様子が見られた。

しかし、小学校教員と中学校教員が協働し、小学校で培った力を基にした中学校での取組を行ったことで、生徒は穏やかな中学校生活を送っている。

また、平成28年度杉並区「特定の課題に対する調査、意識・実態調査」の結果（下表）から、「分かりやすく伝える力」「相手の意図を聞き取る力」「相手に質問できる力」が身に付き、他者を受け入れることへつながっている。そして、学校生活の中でも、「私はこう考えている」としっかりと自分の考えを言い、「自分の言ったことに相手はどう感じるのか」「相手がマイナスの感情をもたないようにどのような言い方をすればいいのか」等を考え、望ましい人間関係が形成されている。

	第1学年	第2学年	第3学年
自分の意見や考えを相手に分かりやすく伝えることができる。	62.1%	66.7%	64.2%
自分と違う意見や考え、気持ちを大切にできている。	87.3%	91.4%	86.4%
自分の考えや気持ちを理解してくれる友達がいる。	97.1%	95.7%	87.7%

※平成28年度杉並区「特定の課題に対する調査、意識・実態調査」報告書より

4 学びのつながり、人の生かし合い

(1) 学びのつながり

ア 学校と社会をつなぐ学び（社会に開かれた教育課程）

学校・園における子どもの自尊感情や自己肯定感を高めるための取組は、家庭や地域等、多くの人々に支えられてこそ、その効果を十分に発揮できると考える。そこで、地域運営協議会や学校支援本部、保護者等と連携を図り、様々な教科等の学習や土曜授業、長期休業日等に行われる取組に、家庭・地域の人材を活用し、共に取り組める活動を推進していくことが重要である。

イ 系統性・連続性を確保した学び

①指導目標・内容（事項）の【系統性】

宮前中学校は、「望ましい人間関係の育成を目指す指導法の工夫～児童・生徒の自尊感情・自己肯定感を高める実践活動を通して～」を研究課題とし、小中一貫教育の連携校である久我山小学校・荻窪小学校とともに、9年間の学びの連続に関わる研究に取り組んだ。

自尊感情・自己肯定感の向上について、発達の段階に考慮し、適切に段差を付けることで児童・生徒の達成感や自己有用感につなげていく。それぞれ以後の単元に明確なつながりはないが、常時活動として取り組むため、小中の教員が適宜情報を共有している。

②学習と評価の方法の【連続性】

「学級経営」「各教科・総合的な学習の時間」「道徳」「特別活動」「指導方法」「教室環境」「言葉掛け」について、小学校第1学年から中学校第3学年までの9年間を見通した年間指導計画を作成した。また、単元や1単位時間の基本的な展開を小・中で共有することで、活動の連続性を確保する基盤とする。

③教科等横断的な学び

【小学校】

特別活動

集団生活に主体的に参加し、よりよい生活を築く実践力を育てる。

道徳

価値を主体的に自覚させることを通して、自己を見つめ、人間としての在り方を追究する。

国語

言語感覚を磨き、豊かな人間性を育てる。

社会

地域社会への理解と社会の一員としての自覚を育てる。

生活

体験活動を通して、人や社会、自然、自分自身の生活について考え、自立の基礎を養う。

【中学校】

道徳

自分の考えや意見を相手に伝えるとともに、それぞれの個性や立場を尊重し、いろいろなものの方
や考え方があることを理解し、寛容の心をもって謙虚に他に学び、自らを高める。

国語

社会生活における人との関わりの中で伝え合う力を高め、思考力や想像力を養う。

④主体的・対話的で深い学び

【小学校】 3段階で構成されるユニットの第1時は、各ユニットの学習に必要な基本的なことを、ビデオ教材を活用して指導している。また、本教材は徹底的に考えたことをワークシートに記録し、アイデアが増えたり、広がったりすればするほど、考えた跡＝ワークシートが増える。タブレット端末の利用は、書いては消してを繰り返す必要がなく、自分のイメージをデザイン化する作業の助けとして有効であると考えられる。

【中学校】 これまで、付箋紙等を用いて行ってきた、自分の考えや友達の考えを見える化（可視化）していく活動を、タブレット端末を活用して行う。思考を可視化することで、自分の考えを整理したり、深めたり、友達の考えに触れたりすることができる。

⑤過去・現在・未来の学びをつなぐ評価

【小学校・中学校共通】

ポートフォリオ評価やパフォーマンス評価などの評価方法を発達段階や学習内容に合わせて効果的に行い、指導に生かすことができるようにする。

(2) 人の生かし合い

ア 学校外

大学や企業プログラムとタイアップして取り組むなど、専門家との連携を図り、より質の高い教育を受ける機会を設けることで、児童・生徒の思考の幅が広がったり、意欲が向上したりすることが期待できる。

イ 異校種間

9年間の連続した指導計画を作成し、小学校では中学入学までの、中学校ではそれまでの既習内容等を明確にする。また、中学校教員による小学生への授業や夏季パワーアップ教室での指導者の交流を行い、協力的指導を行う。

ウ 同校種内

学習到達目標や年間指導計画は、連携関係にある小学校で一定の整合を図る。

I	小中一貫教育 理論編
II	総合的な学び 理論編
III	総合的な学び 実践編 就学前
III	総合的な学び 実践編 小学校
III	総合的な学び 実践編 中学校
III	総合的な学び 実践編 特別支援
IV	資料編

◆◆ 子どもたちの自尊感情・自己肯定感を高める活動 ◆◆

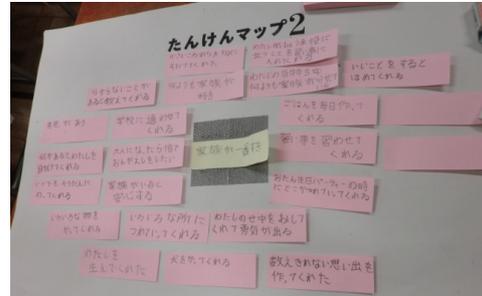
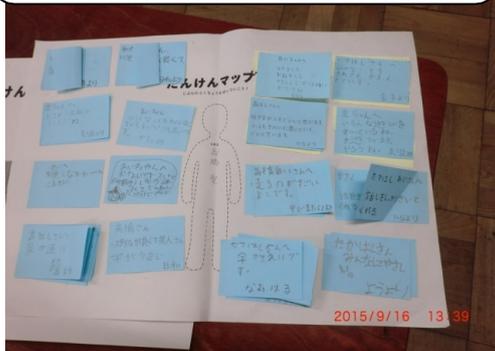
【久我山小学校】

〈自分探検の旅に出発！〉

自分らしさを「広げる」「深める」CMづくりに挑戦です。

たんけんマップ1

自分らしさを見付けるために好きなものや得意なものを書き出す。



たんけんマップ2

「たんけんマップ1」から、CMにして一番伝えたい「自分らしさ」を中央に置く。更に深め、CMの材料を集める。

「たんけんマップ1」では、子どもたちは、「自分とは何だ?」とおそらく今まで考えたことがないであろう問いに、とことん悩んでいました。

自分なりに出し尽くした後、今後は友達に自分のよいところを聞いてみました。(青付箋)

まだまだ、自分探検の旅は続きます。

「たんけんマップ1」から、自分らしいと思う付箋を一つ選んで、それについてとことん掘り下げて考えました。

〈自分探検の旅をした子どもたちのたどり着いた先は・・・〉

挑戦した子どもたちの感想

- はじめは、「いいところ」って何か。のイメージがわきにくく、「いいところ見付け」が難しかった。
- 友達によさを探すときに、「どんなことが好きか」、「どんなことをがんばっているか」など、よさを見付けるポイントが分かるようになってきた。
- 友達と一緒にCMづくりを手伝ってくれて嬉しかった。
- CMづくりを始めたばかりのときは、いいところを見付けたり、伝えたりするのが恥ずかしかったけれど、お互いに見付け合う活動を続けたことで、自分のよさが分かった。



苦労した分だけ、子どもたちの心は耕されたようです。今では、よいところを見付けることが習慣化され、普通の学校生活でも友達のよいところを見付けられるようになりました。

【宮前中学校】

<「アイメッセージ」>

本校では、「お茶の水女子大学大学院研究グループとの協働による心理教育授業」を第1学年の生徒に全8回行いました。

月	授業内容
4月	「お互いのこと、もっと知り合おう！」 学級開き 担任の先生からのメッセージは？
5月	「団結力のあるクラスしよう！」 体育祭に向けて、お互いに励まし合うことの大切さを知る
6月	「謝り方のコツを知ろう！」 よい関係を続けて、もっと仲良くなるために
8月	「自分の気持ちを上手に伝えよう！」 アイメッセージで上手に思いを伝える
10月	「励ましのコトバ 応用編 もっと使えるようになろう！」 合唱祭に向けて、お互いに励まし合うことの大切さを知る
11月	「謝り方のコツ 応用編 もっと使えるようになろう！」
1月	「アイメッセージで上手に断ろう！」
2月	「いろいろな場面で上手に断ろう！」

「アイメッセージ」

主語を「あなた」から「わたし」に変えるだけで、批判的に聞こえないことがある。
自分の意見を伝えるとき、主語を「わたしは～」にしてみる。そうすると、自分の気持ちや考えを相手に伝えるとき、自分の発言に責任をもつことになる。

各教科等の授業の中にも取り入れ、今となっては本校でのスタンダードになった「アイメッセージ」。

「わたしはこう考えている」としっかりと自分の考えや意見が言える生徒が増えました。

しかし、ただ自分の考えを一方向的に伝えるものではありません。

「相手はどう感じるのか」「相手がマイナスの感情をもたないようにするにはどのような言い方をすればよいのか」など、他者に思いやりの気持ちをもって接することができるようになりました。

互いを認め合う場面が増え、望ましい人間関係を築く力が培われています。

I
小中一貫教育
理論編II
総合的な学び
理論編III
総合的な学び
実践編
就学前III
総合的な学び
実践編
小学校III
総合的な学び
実践編
中学校III
総合的な学び
実践編
特別支援IV
資料編

事例2-6 杉並区立高井戸第二小学校・西宮中学校

特設の時間・総合的な学習の時間

単元名

小学校第1学年から第6学年

◆◆ 防災を文化に ◆◆

～私の学びを誰かの助けに～

1 2030年を生きる子どもたちに身に付けさせたい力と教師・学校の役割

(1) 杉並区立高井戸第二小学校・西宮中学校

高井戸第二小学校は、明治34年(1901年)に開校し、長い年月に渡り常に地域や保護者から「地域の中の学校」として愛され、親しまれてきた学校である。杉並区立小学校で最も広い校地面積を生かし、充実した運動スペースを確保している。校庭では、鬼ごっこやボール遊び、長縄跳びをしたり、遊具で元気一杯遊び回ったりする子どもたちで溢れている。

平成28年度は児童数703名、27学級(特別支援学級3学級含む)という規模であり、教育目標は「たくましい子 かしい子 にこやかな子」の育成を掲げている。高井戸第二小学校の子どもたちが健やかに育つようにという願いを込めて、教員全員で作詞をした応援歌も作成している。

高井戸第二小学校の防災教育は誰を助けるかという視点から、自助・共助・公助の3段階に分けられている。自助は、自分が災害の被害に遭わないという段階、共助は、近くにいる他の人を助けるという段階、公助は、公の機能を保つために助けるという段階である。小学校段階では自助が中心となるが、高学年になると共助にも着目することが可能になる。

(2) 育成を目指す主な資質・能力

【小学校・中学校 共通の育みたい力】

危険を予測し回避することのできる児童・生徒の育成～地域と連携し地震から身を守るための防災教育～

安全を確保する力

- ・災害時に安全を確保し、自分や周囲の人々の生命を守る力

安心につながる準備を整える力

- ・災害時を想定し、必要な準備を整えたり、人々の身を守るための工夫について考えたりする力

高井戸第二小学校が特設の時間として学習単元を設定している「防災教育」を充実させることで、震災発生時に防災教育における誰かを助ける視点[自助(近所含)、共助、公助]を獲得し、発達段階に応じて危険を予測し、回避することができる力を着実に育んでいく。

2 多様で一貫性のある総合的な学びにおける本単元の位置付け

	就学前	小学校			
		第1学年	第2学年	第3学年	第4学年
系統性	生活の中で様々なものに触れ、その性質や仕組みに興味や関心をもつ。	自分の身を自分で守る意識を高め、基礎的な防災スキルを身に付ける。		震災時に、自分と周囲の人々が相互に安全に避難できる方法や工夫を考える。	
連続性	<ul style="list-style-type: none"> ・園での避難訓練 ・危険な場所や遊び方、災害時などの行動の仕方が分かり、安全に気を付けて行動する。 ・人の話を注意して聞き、相手に分かるように話す。 	①安全に避難する方法を知る _____ _____ ②安全確保への工夫を考える _____ _____ ④学んだことを地域の防災活動で生かす _____			
協働	<ul style="list-style-type: none"> ・幼児の自発的な活動を生み出す環境を整える。 	<ul style="list-style-type: none"> ・外部講師を招き、防災についての講話を児童・教職員・保護者が学ぶ機会を設定すること ・土曜授業等を活用し、児童・保護者・地域住民等が体験的に防災について学び、震災救援 			



(3) その他

①防災教育を進める意義

阪神淡路大震災や東日本大震災以降も、熊本地震、鳥取地震と震災が続いている。日本は地球に占める国土の面積では1%だが、地球で起きる地震の10%が起きている地震多発国である。その上、南海トラフ等の地震が既に予想されている現状がある。このことから、義務教育の中で防災教育を充実させることは必須のことだと考える。

しかし、学校現場では系統的な防災教育の取組より、毎月の避難訓練の際に関連する講話を行うことが主流である。また、災害を防ぐことはできないが、防災教育を進めることで、被害を軽くすることができる。教養として防災教育は必須であると考えている。(大木先生の言葉:「防災を文化にする」)

②防災教育のボトルネック

防災教育に取り組まないことは考えられないが、実際には防災教育に十分に時間を割く学校は多いとは言えない。それには幾つかの理由が考えられる。

・指導時間の壁

防災教育を阻む最大の壁は、指導時間が限られていること。学校はそれぞれ教科・領域で時間数が決まっているから、防災教育に充てる時間が捻出できない。

・検証不能性の壁

防災教育をいくら進めても、効果的かどうかの検証は、実際に災害が起きてみないと分からない。

・正のバイアスの壁

まさか自分の住んでいるところでは災害は起きないという思い込み。あるいは周囲の人がしていることが正しいことと思う思い込み。

上記のような理由から防災教育にはボトルネックが生まれてしまいがちである。しかし、だからこそ本校の取組が一つの事例となり、各学校の状況に即した防災教育が充実することで子どもたちや地域の人々の生命及び安全を守るための備えが整うことを願っている。

		中学校			
第5学年	第6学年	第1学年	第2学年	第3学年	
自分と地域社会の安全について、自分の役割や地域の備えについて考える。		地域の防災活動等に主体的に参加し、自らの役割を果たす。			系統性
③自分や周囲の人々、地域の安全について考える					連続性
で、防災意識を高める。所の具体的なイメージを共有する。					協働

- I 小中一貫教育 理論編
- II 総合的な学び 理論編
- III 総合的な学び 実践編 就学前
- III 総合的な学び 実践編 小学校
- III 総合的な学び 実践編 中学校
- III 総合的な学び 実践編 特別支援
- IV 資料編

3 学びを通じた成長

(1) 子どもたちの活動する姿

ア 小学校第1・2学年

時	◎目標・学習活動	○指導事項	◆評価
①	◎【大きなじしんがおこると、どうになってしまうのかかかんがえよう】 ・体験談を読み感想を発表する。	○防災頭巾の扱い方を知ること。	◆自分の命は自分で守ることに気付く。
②	◎【きょうしつにいるとき、おおじしんがおこったら…】 ・教室での身の守り方を考える。	○教室内の身の守り方を知ること。	◆場に応じた安全な行動について考えることができる。
③	◎【ひなんくんれんでたいせつなことはなんだろう】 ・「お・か・し・も」等、訓練時に気を付けることを考える。	○避難訓練の仕方を知ること。	◆避難訓練に臨む姿勢や態度を理解することができる。
④	◎【きょうしつがいで、おおじしんがおこったらどうしよう】 ・ダンゴムシのポーズを確認する。	○教室以外の場所での安全な行動について考えること	◆場に応じた安全な行動について考えることができる。
⑤	◎【がっこうからいえまでのみちは？】 ・通学路での危険な箇所を、保護者と一緒に確認する。	○通学路の危険箇所を知ること。	◆登下校の際の危険箇所を知り、安全な行動について考えることができる。
⑥ ⑦	◎【とうげこうのとき、おおじしんがおこったら】 ・危険な箇所を探し、発表する。 ・自分を守る方法を考える。	○登下校時の安全について考えること。	
⑧ ⑨	◎【いえで、おおじしんがおこったら】 ・家庭内の危険について考える。	○防災に関する学習を生かして身近な安全について考えること。	◆身近な安全について考えることができる。
⑩	◎【家での準備】 ・どんな準備が必要かを考える。		



●「HUG：避難所運営ゲーム」を通して、支援が必要な人へどう対応するか等について話し合い考えている様子。どんな出来事が想定されるかについても意見を出し合う。(第6学年)



●土曜授業を活用し、保護者や地域の方と一緒に「避難スペース・簡易間仕切り体験」を実施。災害時のパーソナルスペースを実際に体験する。(全学年)



●「避難リュックに何入れる？」自分の大切なものと災害時に必要なもの。避難リュックの限られた容量の中で、自分の安全を考えて持ち物を選択する学習。(第2学年)

〔ICTの活用〕

- ・ 震災時の様子を児童がイメージしやすいように、当時の写真や関連教材をプロジェクターで提示し、視覚効果を高める工夫を行った。
- ・ 地域全体の様子を児童が捉えやすいように、紙媒体の地図を各自に配布するとともに、全体で危険箇所等を確認する際には、デジタル素材を活用して情報を共有した。

イ 小学校第3・4学年

時	◎目標・学習活動	○指導事項	◆評価
①	◎【学校の外で地震が起きた時の様子を考えよう】 ・学校外で地震が起きたら、どのような危険があり、安全な場所はどこか考える。	○「大きな危険」「小さな危険」「安全な場所」の三つの視点で考えること。	◆「大きな危険」と「小さな危険」の違いを理解している。【ワークシート】
②	◎【「地域防災マップ」現地調査の計画を立てよう】 ・現地調査の向け、役割分担、ルート確認、時間配分を計画する。	○調査方法を確認すること。 ○安全確保や自分の役割について確認すること。	
③	◎【地域防災マップの現地調査をしよう】	○安全確保のため、保護者に依頼すること。	◆身の周りの危険な場所や安全な場所を調べることができる。【メモ】
④	・グループで、大きな危険、小さな危険、安全な場所等を調べる。		
⑤			
⑥⑦	◎【調査結果を共有しよう】 ・同じ地域を調べてきたグループ同士で調査結果の情報を共有する。(学年で実施)	○視点を基に振り返ること。	
⑧	◎【「地域防災マップ」を作ろう】	○調べた内容から伝えたいことを明確にすること。	◆調べたことを分かりやすくまとめることができる。【地域防災マップ】
⑨	・現地調査や調査結果を共有したことを基に「地域防災マップ」を作る。		
⑩			
⑪			
⑫	◎【発表の準備をしよう】	○受け手に分かりやすく伝える工夫を考えること。	◆調べたことを基に、地震が起きた際、起こった後どのような行動をとるべきか判断している。
⑬	・原稿を作り、伝えたいことを整理する。	○考えたことを整理し発表へ向けて話し合うこと。	
⑭			
⑮			
⑯	◎【発表して思いを伝えよう】	○受け手が興味をもって聞くことのできる発表方法や声の大きさを工夫すること。	◆調べたことを基に、相手に分かりやすく発表している。
⑰	・受け手に伝わるような発表会をする。		
⑱	◎【自分の考えをまとめよう】	○防災に関して考えた具体的な例を挙げてまとめること。	◆学習を振り返り、自分の身を自分で守るために自分ができることやすべきことを考えることができる。
⑲	・単元を通して感じたこと、考えたことを作文としてまとめる。		
⑳			

ウ 小学校第5・6学年

時	◎目標・学習活動	○指導事項・留意点	◆評価
①	◎【地震が起きた後の状況について考えよう】 ・地震が起こった直後どのような状況になるか、何か必要になるかを考える。 ・阪神淡路大震災の写真から、震災直後の様子を知る。	○人、物、場所がどうなるかを考えること。 ・震災の大変さを実感できるように写真等の視覚資料を準備する。	◆防災についての既習事項を確認し、実際に起こった震災の状況や人々の思いを知ることができる。
②	◎【被災した人たちの気持ちを調べよう】 ・被災者が何を必要としているのか、どんなことに困っているのかを調べる。 ・班で情報を共有する。	・被災者の気持ちが書かれている本を準備しておく。 ○必要な物、場所、起こりうるトラブルの3点で調べること。	
③	◎【被災した人たちの気持ちを知ろう】 ・前時に調べたことを班ごとに発表する。 ・実際の被災者の日記を聞く。 『6年組の阪神大震災～西宮市立樋ノ口小学校～』	○被災者の気持ちを知り、震災救援所に来る被災者の気持ちを考えられるようにする。	
④	◎【震災救援所の役割を知ろう】 ・高2小の震災救援所になることを知る。 ・震災救援所の役割について、マニュアルを基に班ごとに調べる。 ・班で調べた項目について発表する。	・『3.11を忘れない』の活用。 ○震災が起こったら震災救援所になることを押さえる。現実問題として災害関連死などについても触れる。	◆震災救援所の基本的な役割について理解している。
⑤	◎【救援所で自分たちができる活動を考えよう】 ・震災救援所で自主的にできる活動を班ごとに話し合う。	・6年生として活動できることを意識させる。 ○考えた活動の意図が伝わるように工夫すること。	◆震災時、自分たちができることについて考えることができる
⑥	・前時に話し合った活動を模造紙にまとめて発表準備をする。		◆友達と関わりながら、自分の考えを深めることができる。
⑦			
⑧	・原稿をまとめ、リハーサルをする。		

I 小中一貫教育
理論編

II 総合的な学習
理論編

III 総合的な学習
実践編
就学前

III 総合的な学習
実践編
小学校

III 総合的な学習
実践編
中学校

III 総合的な学習
実践編
特別支援

IV 資料編

⑨	◎【震災救援所で自分たちができる活動を伝えよう】 ・自分たちが考えた活動を発表する。 ・発表に対して10点満点で評価をする。 ・ゲストティーチャーの話を聞く。	○発表が終わったら質問時間を設け、考えがより伝わるようにする。	◆発表を通して、考えを深めることができる。
⑩	◎【震災救援所についてまとめよう】 ・前時で行った発表の振り返りをする。 ・2学期に向けて見通しをもつ。	○実際、震災が起こった場合、自分たちが考えた活動を行っていく必要性を確認する。	◆それぞれの考えを交流し、友達と関わりながら自分の考えを深めることができる。
⑪	◎【防災倉庫について知ろう】 ・震災救援所についての学習を復習する。 ・防災倉庫があるべきものを考える。	○震災救援所の役割を振り返って考えさせる。	
⑫	◎【高二小の防災倉庫を探ろう】 ・防災倉庫の場所、中の物や道具などを確認する。	○防災倉庫の中を確認し物品の用途を知る。	
⑬	◎【不足しているものや家で備えておくべき物についてまとめて発表する】	○震災救援所としての活動ができるかを考えさせる。	
⑭	◎【震災救援所での生活について知ろう】 ・運営や当時の様子についての話を聞く。	○ボランティア経験を聞き、震災救援所の運営の大変さや必要性をより具体的に考えさせる。	◆震災救援所の様子を知り、震災救援所の必要性や大変さについて考えることができる。
⑮	◎【避難生活の様々な体験をしよう】	○安全に配慮し、快適に過ごせる工夫を考えさせる。	◆友達と関わりながら協力して取り組むことができる。
⑯	◎【自分たちができる活動について話し合おう】 ・実際に高二小の防災環境を知った上で、1学期に考えた活動の見直しをする。	○震災への備えを生かした工夫について考えさせる。	◆体験を通して、震災救援所での取組について、更に理解を深めることができる。
⑰	◎【避難生活の様々な体験をしよう】 ・テントを設営する。・水や物を運ぶ。 ・体育館や教室を避難所として区切る。 ・寝袋を着て寝る。・トイレを設置する。		
⑱	◎【自分たちができる活動について話し合おう】 ・実際に高二小の防災環境を知った上で、1学期に考えた活動の見直しをする。		
⑲	◎【防災のまとめをしよう】 ・今まで学習したことを振り返る。 ・考え方が変わったことや新たに考えたことを発表する。		◆今後の生活に防災教育を生かそうとしている。

(2) 子どもたちの成長

ア 学校行事としての避難訓練

これまで「発災→放送→避難→点呼・安全確認」という一連の流れで避難訓練を実施してきた。また、「近くの机の下に頭を入れる」「必ず先生についていく」等、子どもたちにも基本となる動きを指導してきた。しかし、実際に大きな地震があったとしたら、本当に放送機器が使えるのだろうか、大きく揺れている地震の最中に机まで歩くのはかえって危険なのではないか、管理職不在の場合に、指揮系統はどう確立するかなど、本来の地震を想定すればするほどこれまでの避難訓練は改善する必要があると考えた。

そこで、従来の避難訓練に加えて、短時間で日常的に訓練する「ショート避難訓練」を取り入れることにした。ショート避難訓練は、授業中や休み時間、掃除の時間などに、教師の合図で地震が起こったことを想定し、避難行動をとる訓練である。これはほんの短時間でできるという利点があり、授業時数を計上するほどの時間もとらないことから、日常的に地震から身を守る習慣を身に付けることができた。

イ 児童・生徒の防災へ向けた意識の変容イメージ

	自助	共助	公助
低学年	中心課題		
中学年	中心課題	中心課題	
高学年	中心課題	中心課題	補充課題
中学生	中心課題	中心課題	補充課題

 中心課題
 補充課題

防災教育を継続して実施していくと、地震についての恐怖感が克服でき、助かるためにどうすればよいのかという発想が生まれ、災害に対して自信をもって行動できるようになってきた。

保護者に対する効果も大きい。子どもたちが変わったことにより、保護者も大きく変容した。各家庭での防災対策が進み、PTAに「防災サークル」（現在は休止中）ができる等の大きな変化が現れた。

4 学びのつながり、人の生かし合い

(1) 学びのつながり

ア 学校と社会をつなぐ学び（社会に開かれた教育課程）

地震から身を守るために指導すべき内容の中でも、他教科等や朝の会・帰りの会等では指導しきれない内容について、教育課程の標準時数以外に、指導の時間を確保して「特設の防災の時間」とした。

「安全教育プログラム」（東京都教育委員会）では、「必ず指導する基本的事項」について、全てを年間指導計画に位置付けて相互に関連させて指導する、としている。具体的には、朝の会や帰りの会、避難訓練や長期休業日前後、関連教科や総合的な学習の時間及び特別活動などで指導するように示されている。しかし、それらの指導計画に防災教育を取り込んでいくのは、実際のところなかなか難しいため、防災についての指導を欠時（教科等の授業時数としてカウントしない）とした。

イ 系統性・連続性を確保した学び

	指導事項	小学校						中学校	
		第1学年	第2学年	第3学年	第4学年	第5学年	第6学年	第1学年	
自助	防災習慣	緊急地震速報の音で反応						→	
		頭部の保護		教室・特別教室		校庭・デッキ	プール	階段等	校舎内全般
		ショート訓練						ショート避難訓練	
		安全な場所の認識		今いる場所の安全				安全な場所を探す	
	基本的な防御姿勢		ダンゴムシ				頭部保護 顔の保護		
防災知識	危険の大小	教室	学校	学校地域	地域学区	地域使う場所	初めていく場所	火気 爆発物	
	危険の認識	落ちてこない 倒れてこない 動いてこない		重いもの 軽いもの		動いているもの (車)		余震での危険	
	避難の仕方	押さない・駆けない・喋らない・戻らない						→	
地震の知識	地震はどのように起こるか					地震を学ぶ			
	過去の地震に学ぶ					過去の地震を調べる			
	被害を防ぐには					被害大の理由		大地震の時の対応	
特支学級	ヘルプカード	作る	見せる	地域へ広める		駅に広める			
共助	地域の防災					地域防災	震災救援所を手伝う		
	助けを求めている人					HUG			
公助	自治体の防災体制					報告	けがの対応		
						知る	学ぶ		

ウ 教科等横断的な学び

①総合的な学習の時間

第3学年から第6学年の総合的な学習の時間では、地震から身を守るために、大切なことを調べたり、考えたことを発表したりすることで、将来、震災救援所が立ち上がった際に、自分で仕事を見つけて取り組み、地域に貢献できる児童を育成することを目指した。第3学年で校内の安全マップ作り、第4学年で地震の安全を視点とした地域の安全マップ作り、第5学年で地震について各自で課題を設定し、調べて発表する学習、第6学年で震災救援所の立ち上げにどのように関わられるかを考える学習を計画した。

しかし、第6学年での震災救援所の立ち上げは、これまでは土曜授業の際に、実際に段ボールハウス等を設置するなどの工夫は行ってきた。

私たちは、児童が様々な場面を想定し主体的に震災救援所での運営や対応について学びを深めるために、さらに効果的な教材がないかどうかを検討した。そこで見付けたのが、先の「HUG（避難所運営ゲーム）」である。

これは、他自治体が開発したカードゲームで、避難所で起こる様々な出来事に対応していくものである。カードゲームに興味のある児童はもちろん、日頃ゲームをあまりしないような児童も自分の考えを出し合い、話し合いを進める姿が見られた。

実際に震災が発生した際、HUG どおりに対応できることは少ないであろう。しかしながら、避難所を設置・運営する際にどのような視点が必要になるのかを学ぶ絶好の機会になる。そして、自分と多くの人々を守るために、「自分たちも、震災時に役に立つことができるかもしれない」という意識と意欲を育むことにもつながった。

ア 主体的・対話的で深い学び

系統的な防災教育の積み重ねにより、自分の身の守り方や家族の安全につながる家庭での備えという防災の基礎的知識を活用し、学校での安全や地域での安全を主体的に、状況に即して学び備え続けていくための意欲・関心を高める。

イ 過去・現在・未来の学びをつなぐ評価

- ・ 災害（地震）が引き起こす危険な状態について知り、安全な避難の仕方について知る。
- ・ 身の回りの危険や安全について調べ、災害時の行動について状況ごとに考える。
- ・ 災害への備えについて進んで学び、生活に生かそうとする。
- ・ 自分の安全と身近な人たちの安全の双方を大切にし、災害に備えながら自己の生き方を考える。

(2) 人の生かし合い

ア 学校外

- ・ 外部講師を招聘し、防災への考え方について学ぶ機会を設ける。
- ・ 自分の命を自分で守るためには、児童と家庭との共通認識が重要であり、家庭との連携が必要となる。家の中で、地震が起きた時にどんな危険があるかを確認する家庭学習を通して、家族と防災について考える機会となり、保護者の防災意識も高められると考えた。

イ 自校内

- ・ 学校支援本部との連携により、土曜授業の際に地域や保護者と一緒に学べる場を設定する。
- ・ 防災の備えの必要性について、朝会や集会で児童に向けて発表したり、保護者会で伝えたりして、理解を深める。
- ・ 下級生・地域・保護者を対象にした発表方法の工夫として、劇やニュース番組の形態にしたり、クイズを行ったりすることで、興味をもって聞いてもらうことを目指した。学習を通して自分たちが考えたことを伝え、下級生・地域・保護者に防災について考えてもらえるようにした。

ウ 異校種間

- ・ 西宮中学校生徒、久我山幼稚園児が参加した合同講習会の実施

HUG ってなあに？

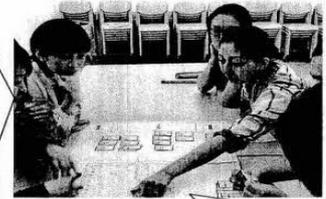
（文章：静岡県公式ホームページ抜粋）

（写真提供：杉並区立高井戸第二小学校）

日本は、世界有数の地震国であり、いつでも大地震が発生しても不思議ではありません。大地震が発生した場合、家屋の倒壊や津波、火災、山・がけ崩れなどにより、被災した多くの人々が避難所での生活を強いられることとなります。

もし、あなたが避難所の運営をしなければならない立場になったとき、最初の段階で殺到する人々や出来事にどう対応すれば良いのでしょうか。

★ 避難所 HUG は、避難所運営を皆で考えるためのひとつのアプローチとして静岡県が開発したものです。避難者の年齢や性別、国籍やそれぞれが抱える事情が書かれたカードを、避難所の体育館や教室に見立てた平面図にどれだけ適切に配置できるか、また避難所で起こる様々な出来事にどう対応していくかを模擬体験するゲームです。



★ プレイヤーは、このゲームを通して災害時要保護者への配慮をしながら部屋割りを考え、また炊き出し場や仮設トイレの配置などの生活空間の確保、視察や取材対応といった出来事に対して、思いのままに意見を出しあったり、話し合ったりしながらゲーム感覚で避難所の運営を学ぶことができます。

HUG は、H (hinanzyo 避難所)、U (unei 運営)、G (game ゲーム) の頭文字を取ったもので、英語で「抱きしめる」という意味です。避難者を優しく受け入れる避難所のイメージと重ね合わせて名付けました。

◆◆ 防災教育ビフォア & アフター ◆◆

1 防災教育取組へのきっかけ

本校が防災教育に取り組み始めたのは、平成24年度からである。きっかけは、東京大学地震研究所（当時）の大木聖子先生*の知己を得たことからであった。

平成24年1月の校長会研修は、「防災教育について」と題して、東京大学地震研究所の大木聖子先生を講師にお迎えして実施した。その頃、防災教育にそれほど関心をもっていなかったものの、せっかくの機会だからと出向き、エネルギーな大木先生の講演に、心を打たれた。

その要旨は、地震が起きるメカニズム、どうすれば災害から身を守れるか、そのための学校管理職の果たす役割等々であった。その講演の途中で、大木先生が突然涙を見せた。大木先生は、3.11の少し前に、修学旅行で来所した気仙沼市の女子高校生に地震後の津波の恐ろしさを強調しなかった。今、あの子どもたちは無事であるかどうか、無事でなかったら、地震学者としての自分の責任だと感じていたからだという。

大木先生は地震学者ではあるけれど、対象は地震学というより防災学（そのような学問領域があるのか分からない）であり、地震という災害を最小の被害で食い止める行動とそのため地震の理解というのがその守備範囲なのだろうと推測している。そして、この先生をお迎えして、防災教育について講演をしてもらえれば（私がこの講演のビフォアとアフターで意識が大きく変わったように）教員の意識も大きく変わるだろうと考えたからである。

この時期は校舎建て替えの最中であり、小中一貫の枠組みを模索している最中ということもあり、西宮中学校（当時：秋山純子校長）の体育館をお借りして共同の講演会を実施した。講演会では2校の震災救済所の皆さんや近隣の幼稚園（久我山幼稚園）保育園等も加わり、この地域の防災意識が飛躍的に高まった。以降、本校では防災教育の充実を目指して、校内研究を防災教育とし、防災教育の授業をすることにした。

*現：慶應義塾大学環境情報学部准教授

2 「何の時間にするのですか？」

校内研究として防災教育に取り組もうとすると、何の時間で防災教育の授業をすることかと思われることになる。今までのように、避難訓練だけなら、欠時扱いで済ませることができた。（欠時扱いとは、その時間は、授業時数に該当せず不算入として扱うことを意味する。）しかし、防災教育を積極的に進めていくためには、防災の授業を実施することが必要である。時間数も多いので、それらも全て欠時扱いという訳にはいかない。

国、都、区の読本を調べてみると、なんと驚いたことに、理科の時間、国語の時間から捻出等の記述がある。各教科主任に集ってもらい検討したものの、各教科とも現在の内容以外に取り扱える時間数をもちにくいということであった。なるほど、国、都、区もそれぞれが防災教育の読本を出して力を入れていながら、防災教育が進まない理由がこんなところにもあったのかと改めて感じた。

3 解決策

本校では、その解決策として夏季休業日を3日程度短くし、おおむね15時間程度の時間数を生み出し、その時数を防災教育に充てるようにした。その時数に従来の避難訓練の欠時を加え、どの学年も20時間程度の時数を防災教育に充てることにした。夏季休業の開始が遅れることもあり、保護者にも丁寧に説明して了解をもらった。

I
小中一貫教育
理論編II
総合的な学び
理論編III
総合的な学び
実践編
就学前III
総合的な学び
実践編
小学校III
総合的な学び
実践編
中学校III
総合的な学び
実践編
特別支援IV
資料編

事例2-7 杉並区立富士見丘小学校（・富士見丘中学校）

特別活動・総合的な学習の時間

単元名

小学校第6学年、中学校第1・2学年

◆◆ 富士見丘わが町会議 ◆◆

～自分たちの町を自分たちでつくる力を育てる～

1 2030年を生きる子どもたちに身に付けさせたい力と教師・学校の役割

(1) 杉並区立富士見丘小学校（・富士見丘中学校）

富士見丘小学校の学区は、学校を中心に東西と南へ長く伸び、児童の生活エリアも異なる。そのため、小学校第3学年の社会科の学習で地域の人々の生産や販売について学習する際、学校近くのスーパーマーケットを見学しても、普段の生活圏外に当たる児童も少なくない。

地域と一口にいても、決して一つの地域という考えにはならず、学区に幾つもの地域が存在しているとの印象がある。そのため、学校が児童・保護者・地域を結び付ける役割を担っており、確実に役割を果たすことの重要性を承知している。

本校の総合的な学習の時間と関連している特別活動「富士見丘わが町会議」を充実させることで、連携する中学校との「つながり」「生かし合い」はもちろんのこと、地域と家庭と学校とを結び付けることやコミュニケーション能力の育成を図ることができると考えている。

(2) 育成を目指す主な資質・能力

【小学校・中学校 共通の育みたい力】

実践を見通す力

自分の思いや考えをもち、実現させようとする力

合意形成する力

互いの思いや考えを伝え合い、折り合いを付けたり、よりよい考えにまとめたりする力

2 多様で一貫性のある総合的な学びにおける本単元の位置付け

	就学前	小学校			
		第1学年	第2学年	第3学年	第4学年
系統性	幼稚園生活を楽しみ、自分の力で行動することの充実感を味わう。	仲良く助け合い学級生活を楽しくする。		協力し合って楽しい学級生活をつくる。	
連続性	身近な環境に自分からかかわり、発見を楽しんだり、考えたりし、それを生活に取り入れる。	①まちを知る	②まちを調べる		
		④実践する			
協働	幼児と児童の交流の機会を設けたり、小学校の教師との意見交換や合同研究の機会を設けたりする。	<ul style="list-style-type: none"> 年間指導計画上の学習の到達目標を共有したうえで、学級や学年の担当間で共通理解を図る。 代表委員会、生徒会担当が中心となり、互いの学校の進捗状況や内容を十分に理解し合い、 家庭や地域など実生活や実社会との関連を一層深め、家庭や地域の人々との連携、社会教育 			



【小学校】 学級活動を通して、培う力

伝え合う (出し合う)	<ul style="list-style-type: none"> ・ 根拠をもって話す。 ・ 意図をくみ取りながら聞く。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 提案理由に沿った意見を言う。 ・ 情報を正確に伝える。
話し合う (比べ合う)	<ul style="list-style-type: none"> ・ 提案理由を基に意見を言う。 ・ 本番を想定して意見を言う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 相手が納得できるような理由を示す。 ・ 反対ばかりでなく、代案を出す。
深め合う (まとめる)	<ul style="list-style-type: none"> ・ 一人の考えでも尊重する。 ・ 互いに歩み寄りまとめる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 相手の気持ちを尊重する。 ・ 全員が納得の上で決定する。

【中学校】 (小学校で培った力を基に) 言語活動を生かした教科の授業による学力向上

集団討論 グループでの意見交換 ディスカッション	<ul style="list-style-type: none"> ・ 他者の考えと自分の考えを比較・検討し、考えを深める。 ・ 相手の立場を尊重して意見を述べる。 ・ 根拠を明確にして述べる。 ・ 既習の知識を用いて意見を表明する。 ・ 理論的な構成や展開を考えて、相手に伝える。 ・ 目的や場面に応じて、適切な言葉を選んで表現する。 ・ 的確な根拠を基に、正しい情報を選択する。
--------------------------------	---

		中学校			
第5学年	第6学年	第1学年	第2学年	第3学年	
信頼し支え合って楽しく豊かな学級や学校の生活をつくる。		学級や学校の生活の充実と向上を図る。			系統性
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; display: inline-block;">富士見丘わが町会議</div>					連続性
		③提案・協議をする			
取り組む。 施設等を活用する。					協働

- I 小中一貫教育 理論編
- II 総合的な学び 理論編
- III 総合的な学び 実践編 就学前
- III 総合的な学び 実践編 小学校
- III 総合的な学び 実践編 中学校
- III 総合的な学び 実践編 特別支援
- IV 資料編

3 学びを通じた成長

(1) 子どもたちの活動する姿

四つの提案から、「C きずなと緑の町一句」が選ばれた。他の三つの提案については、後の第4項で触れることとする。

【提案】

<C>きずなと緑の町一句

願い

町の紹介・自慢一句づくりをきっかけに皆で町を好きになり、参加者に育てた種を配り、緑を広げていきたい。

取組

①募集

低学年・中学年・高学年・中学生の部ごとに作品募集（季節によってお題を変える）

②紹介

ミニ黒板を利用して日替わりや週替わりで一句掲示

③つながり

参加者に育てた種を配布

将来的に

・一般の部、町一句大会、AB案と連携してカレンダー作成 など

【実践】

○第1期

①募集

校内募集のみ

【部門】

- ・自然部門……町の緑や自分で育てた植物、川や富士山などの風景
- ・きずな部門……行事や伝統、地域をつながり、挨拶、人との触れ合いなど
- ・町・施設部門……神社や商店街、浴風園などの施設、街並みなど
- ・その他……部門分けしにくいもの

②取組

小学校低学年

学習活動に積極的に俳句（川柳）づくりを入れる。

（例）朝顔の観察、地域巡り、施設交流、祭り等

小学校中学年以上、中学校

国語科と関連させたり、他教科等の学習活動に積極的に俳句（川柳）づくりを入れたりする。

○第2期

①募集、②取組ともに、第1期と同様に行う。

○第3期

①募集

校内及び家庭・地域へ募集 *応募ポストを富士見丘小学校・富士見丘中学校の校門前及び浴風園等の社会施設や富士見丘商店街等に設置する。

②取組 校内では、第1期と同様に行う。

<第2期 入賞作品 >

「わが町大賞」

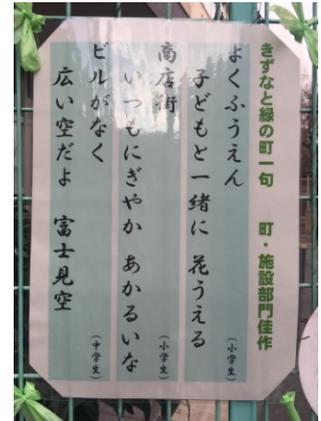
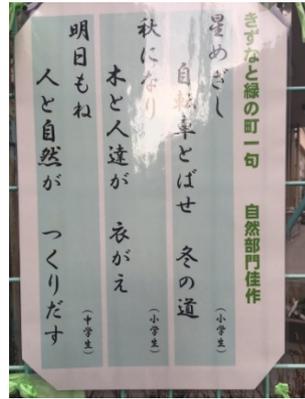
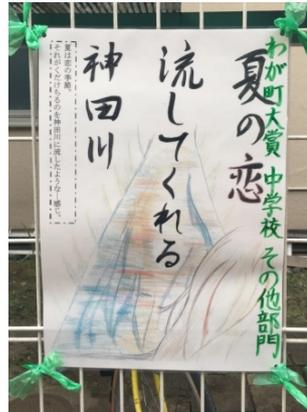
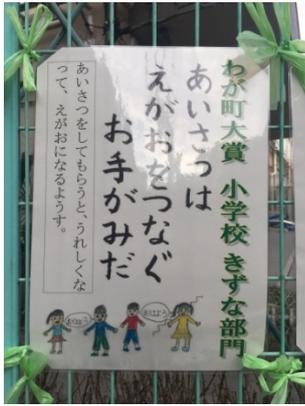
(きずな部門 小学校)

(その他部門 中学校)

「佳作」

(自然部門)

(町・施設部門)



(2) 子どもたちの成長

平成 27 年度に本取組の中心となり取組を行った児童・生徒の地域社会へ関する意識・実態は、下表、平成 28 年度杉並区「特定の課題に対する調査、意識・実態調査」の結果から、自分が住んでいる地域への意識・実態が高まっていることが分かる。特に、提案を行った現中学校第 1 学年の生徒の地域への愛着や地域社会の一員としての意識が高い。

表 平成 28 年度杉並区「特定の課題に対する調査、意識・実態調査」の結果より

	小学校第 6 学年	中学校第 1 学年	中学校第 2 学年
今住んでいる地域への関心・関わり			
学校や家の近所で知っている人に会ったときは、自分から挨拶をしている。	80.5%	87.7%	90.7%
今住んでいる地域が好きである。	73.2%	91.4%	82.4%
今住んでいる地域の行事に参加している。	56.1%	66.7%	56.0%
今住んでいる地域は、自分たちが協力することにより、そこで生活する全ての人々にとってよりよいものにできると思う。	70.1%	77.5%	66.7%
集合的（社会）効力感（相互承認の感度）			
学校での生活は、自分たちが協力することで、自分にとってもみんなにとってもよりよいものにできると思う。	68.3%	88.9%	88.0%
今住んでいる地域は、自分たちが協力することにより、そこで生活する全ての人にとってよりよいものにできると思う。	70.0%	77.5%	66.7%
自分が積極的に関わることで、日本や世界で問題になっていることは、少しでもよい方向に進むと思う。	46.3%	58.0%	45.3%

このことから、本活動を継続して取り組むことで、児童・生徒の地域への意識が高まりとともに、本活動を通して、よりよい人間関係を築き、楽しい生活をつくるなど、自分たちの地域の充実と向上のために主体的に参画し、進んで話し合い、協力して実現しようとする態度の育成がより期待できる。

そのためには、幼稚園では、幼児が安心して自分を出し、感覚や感触、感情に出会うところからスタートし、様々な遊びや生活の場面の中で、バランスよく感情体験や共感体験を保育者や友達と積み上げながら、自尊感情を育ててほしい。そして、小学校では、幼稚園での学びを基に、児童が互いに触れ合い、協力し合い、認め合う中で自分への自信をもち、学級や学校生活において積極的に自分を生かす場や機会を多く設定し、よりよい生活や人間関係を築こうとする自主的、実践的な態度の育成を目指す。さらに中学校では、自分がいかに行動すればよいかを深く考え、感情や衝動をコントロールし、自分で決めたこと状況に応じて着実に行動したり、現実に即して実行可能な方法をとったりする自主的、実践的な態度の育成が大切である。

I 小中一貫教育
理論編

II 総合的な学び
理論編

III 総合的な学び
実践編
就学前

III 総合的な学び
実践編
小学校

III 総合的な学び
実践編
中学校

III 総合的な学び
実践編
特別支援

IV 資料編

4 学びのつながり、人の生かし合い

(1) 学びのつながり

ア 学校と社会をつなぐ学び（社会に開かれた教育課程）

総合的な学習の時間で、富士見丘地域について学習してきた。町のよさや課題を自由に出し合った中には「もっと挨拶を交わせる町にしたい」「安全な町にしたい」「小さい子たちに町のことや安全のことを直接教えてあげたい」「高齢者の方々も参加できる活動がしたい」などの願いが出た。さらに、いざというときに助け合える関係を築いていくことも大事なことと考え、富士見丘の町のみんながつながる（心・言葉・行動）ために自分たちにできることや動き出せることを探っていくことにした。

富士見丘地域について調べるにつれ、町に対する愛着が大きくなっていった。そこで、わたしたち子どもでも、わが町富士見丘を自慢の故郷にする助けができないかと考え、代表委員会に提案した。さらに、小学生だけでは難しいことも中学生と一緒にならできるのではないかと考え、中学校生徒会にも協力をお願いした。このようにして、今回の3学年合同の学級活動が実現した。ただし、平成28年度中の実施は難しいため、次年度に、小学校代表委員会と中学校生徒会がタッグを組み、わが町富士見丘をよりよい町にするための活動をこの会議で決めていきたいと考えている。

（「富士見丘わが町会議」小学校第6学年からの提案より）

【小学校第6学年から、四つの提案】

<A>町のキャラクターをつくらう

願い

町のキャラクターを挨拶の輪を広げるきっかけにして、町を活性化したい。

取組

①作成

町を表現するキーワードを集めて図案化→図案修正→全児童生徒で選択し決定

②紹介

学校の掲示板で決定したキャラクター紹介

③つながり

学校行事で紹介し、先生方やPTAの方々や自転車や防犯腕章にキャラクターシールを付けていただく
→名前の方からない方でもキャラクターシールを通して認識し、児童・生徒から進んで挨拶

将来的には

簡易的なグッズ、Tシャツを着て挨拶運動の実施、隠れキャラクターの設置、町会や祭り（出店）での活用

町のお気に入りの風景を伝えよう

願い

見過ごしている町のよさ再発見の発信によって地域の団結力を高め、未来にも残したい。

取組

①募集

絵、写真、手作りパンフレットで募集

②紹介

賞を付けて学校のフェンスに掲示（期間を決めて紹介する作品を交換）

③呼びかけ

作品モデルになった場所めぐりや場所探しの実施、作品への感想を募集

④つながり

いただいた感想へのお礼を掲示

将来的には

町の皆さんから作品を募集し、児童館や町会の掲示板、富士見ヶ丘駅に掲示

<C>きずなと緑の町一句

*第3項（1）を参照

Ⅰ
小中一貫教育
理論編

Ⅱ
総合的な学び
理論編

Ⅲ
総合的な学び
実践編
就学前

Ⅲ
総合的な学び
実践編
小学校

Ⅲ
外国語教育
実践編
中学校

Ⅲ
総合的な学び
実践編
特別支援

Ⅳ
資料編

<D>スタンプラリーでウォーキング	
願い	スタンプラリーを通して町に興味をもち、町の再発見をしながら、子どもも高齢の方々もみんなで楽しくつながっていききたい。
取組	①安全な場所探し 各校の正門付近、協力いただける場所 ②スタンプ作成 ゴム版・消しゴムを彫って作成 ③紹介 手紙・ポスター・学校行事で家庭地域に発信 ④つながり その場で味わってほしいおすすめの表示、幾つか集めると1枚の絵になる図案の工夫
将来的に	町のキャラクターを使ってスタンプ作成、季節ごとに変わるスタンプ、設置場所を増やす。

イ 系統性・連続性を確保した学び

①指導目標・内容(事項)の【系統性】

富士見丘小学校・富士見丘中学校では、「コミュニケーション能力の育成～伝え合う、話し合う、深め合うための言語活動の充実を目指して～」を研究主題とし、小中一貫教育の理念を生かした学習指導の改善・充実を図った。

小学校では、生活科・総合的な学習の時間で、共通のテーマ「わが町富士見丘」を設定し、以下の活動に取り組んでいる。

「わが町富士見丘」(活動内容)	
第1学年	町探検・発見
第2学年	
第3学年	地域を知る・高井戸囃子
第4学年	地域の施設・歴史・福祉
第5学年	地域の環境
第6学年	私とわが町の未来

小学校・中学校との合同学級会「わが町会議」を実施

そして、中学校では、小学校での学びを基に、共通のテーマ(ねらい)「様々な人との「ふれあい」を中心に、多様な文化や歴史と「ふれあう」ことで豊かな心を育てる」「多くの「ふれあい」で承認された成果を通して得た自信に基づいて、自己の生き方を見つめさせる」とし、各学年の目標やねらいを以下のように設定している。

目標やねらい	
第1学年	地域を活動し、自己及び他者を理解する。
第2学年	地域を土台として、広い社会を視野に入れた思考を深める。
第3学年	国際社会に目を向け、幅広い視野の中で将来を見通した生き方を考える。

②学習と評価の方法の【連続性】

小学校では、学級活動を通して集団討議力のアップを目指し、話し合い活動の中で、折り合いを付け、新しい価値を見だしていく経験を大切にしている。そこで培った力を基にして、中学校では言語活動を生かした教科等の授業による学力の向上を目指している。このような基本的な流れを小中で共有することで、活動の連続性を確保する基盤とする。

③教科等横断的な学び

小学校 「対話・会話」について系統的に指導する。

中学校 系統的な言語活動の指導で、集団討論や面接で自己の考えを表現できる力を育てる。

④主体的・対話的で深い学び

小学校第5・6学年と中学校第1学年の児童・生徒が一堂に会して開催する「わが町会議」では、プレゼンテーションソフトを利用した提案や発言内容のキーワードの記録の提示等が考えられる。

また、小学校代表委員と中学校生徒会役員の合同会議を行う際、コミュニケーションソフトを活用し、ビデオ通話を適宜利用することで、安全への配慮や時間の確保が可能になる。このことは、必要なときに打ち合わせを行いやすくなり、短時間での打ち合わせを重ねることで、より共通理解を図ることができる。

さらに、プレゼンテーションソフトや文書作成ソフトを活用し、提案資料や掲示用作品（一部）、地域等への案内等の作成する際に活用することもできる。

しかし、本活動では、コミュニケーション能力の育成を目指しており、上記のようなICTを利用する効果を十分理解した上で、あえてICTを活用せず、人と人が顔を合わせ、表情や言葉の抑揚や強弱等を感じながら進めていくことを大切にしてきた。

⑤過去・現在・未来の学びをつなぐ評価

学年に応じた企画力や実現に向けて実践力を高めることへつなげている。

また、以下の表のように学級活動の評価規準を設定し、学びのつながりを明確にしている。

	小学校第1・2学年	小学校第3・4学年	小学校第5・6学年
集団活動や生活への関心・意欲・態度	司会や記録の仕事、話合いに進んで取り組もうとしている。	司会や記録の仕事、話合いに意欲的に取り組もうとしている。	司会や記録の仕事、話合いに積極的に取り組もうとしている。
集団の一員としての思考・判断・実践	よりよい学級づくりの生活づくりに向けて考え、判断し、話し合っている。	よりよい学級の生活づくりに向けて考え、判断し、まとめようと話し合っている	活動計画に基づき、よりよい学級や学校、地域での生活づくりに向けて考え、判断し、建設的に話し合っている。
集団活動や生活についての知識・理解	司会や記録の仕方の役割や基本的な話合いの進め方を理解している。	計画委員会の仕事の内容や計画的な話合いの進め方を理解している。	計画委員会の仕事の内容や効率的な話合いの進め方を理解している。

(2) 人の生かし合い

ア 学校外

町会や商店街などと協力して、共に住む地域をよりよくしようとする共通の目標に向けた取組を推進する。そのために、家庭や地域など実生活や実社会との関連を一層深め、家庭や地域の人々との連携、社会教育施設等を活用するなどし、よりやりがいのある活動を展開する。

イ 異校種間

具体的な取組内容の目的や必要性などを代表委員会、生徒会担当が中心となり、互いの学校で共有することで、進捗状況や内容を十分に理解し合い、取り組むようにする。

ウ 同校種内

学習到達目標や年間指導計画は、連携関係にある小学校で一定の整合を図る。

I 小中一貫教育
理論編

II 総合的な学び
理論編

III 総合的な学び
実践編
就学前

III 総合的な学び
実践編
小学校

III 外国語教育
実践編
中学校

III 総合的な学び
実践編
特別支援

IV 資料編

◆◆ よりよい町に“わたしたちの町富士見丘” ◆◆

<こんな町にしたい>

第6学年の児童は、個人やグループで富士見丘の町のよさ・課題を出し合うところから始めました。そして、身近な人への取材も含め、よさ・課題を明らかにしました。

よいところの継続・発展のために…。課題の改善のために…。

自分たちが動き出せることを具体化するために、四つのプロジェクトを立ち上げました。その四つのプロジェクトこそが、「わが町会議」で提案された四つの取組です。

この四つのプロジェクトは、第6学年の児童全員からの発信であり、自分が属しているプロジェクトについては、誰もが説明できるくらい思いのこもったものになりました。

<実践に向けて>

「わが町会議」で、<きずなと緑の町一句>が決まりました。ここからが、代表委員会と生徒会の連携の見せどころです。

約500mほどの距離。

やりくりして作りだした時間を有効に使うには、移動の時間も惜しいくらいです。

車の通りが多い道。安全確保は最大の留意事項です。

テレビ電話ができれば…。

もちろん、わが町会議では、人と人とが顔を合わせることを大事にしてきました。

しかし、会議で決めたことを実践に移す際には、ICT環境によって合同会議にかかる負担をすいぶん軽減することができるはずです。

<地域への情報発信>

地域の方へ「知ってもらいたい」「参加してもらいたい」。

地域への呼びかけ



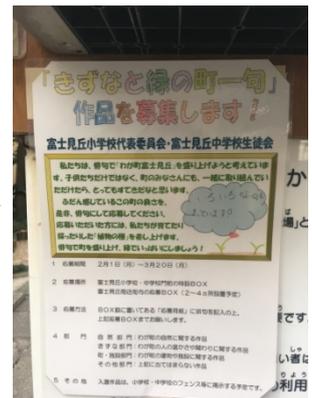
取組の概要

応募ポスト

*学校正門・浴風園・商店街等に設置



地域の掲示版・回覧板でも周知



*応募してもらったお礼に、ポストの中に「植物の種」を置きました。種は子どもが育てた植物から採れたものです。



I 小中一貫教育 理論編
II 総合的な学び 理論編
III 総合的な学び 実践編 就学前
III 総合的な学び 実践編 小学校
III 総合的な学び 実践編 中学校
III 総合的な学び 実践編 特別支援
IV 資料編